

民間教育事業の実態に関する調査

古 多

野 田

有 治

隣 夫

民間教育事業の実態に関する調査

多田治夫
古野有隣

I 調査の概要

1 調査のねらい

現代は激動の時代であるといわれる。人間の生活をめぐるさまざまな側面においてめまぐるしく起る変化のテンポの早さは、これまでの人間の歴史においてかつて経験したことのない程のものだからである。「十年一昔」は今日では「一年一昔」に変わったとさえいいうるくらいである。

生涯教育ということばがしきりに人の口にはのぼるようになったのも、こうした事情を背景にしてのものと考えられよう。変化にとり残されないうために、どのような変化が起ろうともきちんとそれに対応した生き方をみずから見いだす力をつけるために、生涯を通じて学習をする必要性が、それを可能にする条件である余暇の増大とあいまって一般

に認識されつつあるわけである。

そのような学習要求を満足させるためのものとして、公的には社会教育の名でいわれる学習機会が存在しているわけであるが、それに加えて、民間の各種の団体・機関が開設する学習の場もいちぢるしく増大している。レジャー産業とならんで知的産業を次代の成長産業とする見方も一部に現われているくらいである。

これまで民間サイドでの教育事業については、ほとんどその実態が把握されていなかったといえる。もちろん一口に民間サイドの教育事業といっても、その範囲も必ずしも明確ではないし、各種多様な形態・性格のものが含まれており、そう簡単なことではない。今回はまず新聞社が実施している教育事業を対象とし、この問題にとりくむ第一歩とすることとしたわけである。

したがってこの調査においては

① 新聞社の開設している学習機会にはどのような人が参加しているのか。

② それらの人をその機会に結びつけた要因はなにか。

③ それらの人はそこでどのような学習活動をしているのか。

④ そして、そのような学習活動ないしはそれを取りまくことがらについてどのような評価をしているのか。

といった角度からその実態の一側面をあきらかにしようとしたのである。

そしてさらに、公的社会教育での学習機会への参加者の場合とも比較することも一部加えることによって、それぞれの特徴を見いだそうという試みも付加することとした。

2 調査の対象

前述の調査のねらいにしたがって具体的な対象としたのは次の三つである。

① 「朝日カルチャーセンター」

② 「北国文化センター」

③ 石川県婦人教育研究集会

本稿においては、①および②における調査データの分析を中心にし、③については部分的にそれらとの比較の材料としてとりあげることとした。

それぞれについては別章でやや細かくそのあらましを記すこととするが、「朝日カルチャーセンター」は朝日新聞社が東京都新宿区において開設し、「北国文化センター」は金沢市において、北国新聞社が開設しているものである。後者は、小松市でもごく一部の科目が開講されているが、今回の調査は金沢市での教室のみを対象としている。最後の石川県婦人教育研究集会であるが、①および②にたいしての調査実施とはほぼ同時期に、石川県下の各種の婦人教育事業への参加者の代表者（格の婦人）の参集を得て開催された集会を利用して調査を行なったものである。それぞれの回答者数（回収後不十分な記入状況のものを除いたもの）は次のとおりである。

集会		
石川県婦人家庭教育研究		291
北国文化センター		518
朝日カルチャーセンター		284
調査地点	回答者数	

3 調査の実施

「朝日カルチャーセンター」「北国文化センター」の場合はいずれも、昭和五十年三月中旬の一週間の期間内にそ

それぞれの教室において調査票を配付し、翌週（一部は翌々週）の授業の日に持参してもらう方法をとった。石川県婦人・家庭教育研究集会は、昭和五十年二月二十五日の実施当日、会場で受付時に調査票を配付し終了時に提出してもらったものである。

Ⅱ 朝日カルチャーセンター調査

1 朝日カルチャーセンターの概要

当センターは朝日新聞社がその文化事業の一つとして昭和四十九年四月に開設したものである。新宿副都心にそびえる超高層・巨大ビルの一つ住友ビルの四階と四十八階に大小二十教室を擁して、二〇〇科目以上の講座を開設している。

いつでも、だれでも、必要に応じて学習の機会が得られるという生涯教育の理念を実現するひろばとして、このセンターは、最新の設備が整った教室で、心のふれ合いを大切にしながら、自分をみがくための場を提供しようとするものである。

朝日カルチャーセンターの講座は大きくは次の一六コースと特別講座から成っている。（調査時点で）

- ① 人間を考えるコース
- ② 文学コース

- ③ 日本を考えるコース
 - ④ 暮らしの設計コース
 - ⑤ コミュニケーションコース
 - ⑥ 子どもを考えるコース
 - ⑦ ことばと文化コース
 - ⑧ 法律・経済コース
 - ⑨ 美術コース
 - ⑩ 手芸・工芸コース
 - ⑪ 書道コース
 - ⑫ 棋道コース
 - ⑬ 生け花・茶道コース
 - ⑭ 音楽・舞踊コース
 - ⑮ 料理コース
 - ⑯ 健康コース
- そして、それぞれのコースの中にいくつかの科目が、三カ月ないし一年を期間として設けられているわけである。この調査を行なったのは一九七四年一〇月～一九七五年四月の学期内になるわけだが、その学期において開講されていた科目の一部を列挙すると以下の如くである。
- ・人間を考えるコース
- 「現代人の宗教」（第二期）―変革期のなかの宗教―
「都市と人間」

- 「文明の旅」
- 「易学と人生」
- 「交通と社会」
- 「アラブの社会と文化」
- 「宇宙と星」
- 「高年期を考える」
- 「ヒューマニズムについて」
- 「バーソナリティ論——人間とはなにかを考える——」
- 「坐禅・写経」
- 「文化人類学（アフリカ）」
- 「ユダヤ・イスラエルの社会と文化」
- 「ニホンと私——日本人との対話を求めて」
- 。文学コース
- 「漱石の文学」
- 「短歌」
- 「現代詩」
- 「源氏物語を読む」
- 「俳句」
- 「芭蕉の文学」
- 「海外文学散歩Ⅱ ロシヤ文学」
- 「シナリオ」
- 「万葉集鑑賞」

これらのコースのうち、今回の調査は、開催曜日・時間・人数等の点を考慮し、次のコースへの参加を対象とした。

語学領域：アラビヤ語、ロシヤ語

教養領域：アラブの社会と文化、漱石の文学、俳句、日本古代史、カウンセリング、母親のための音楽、妻と夫の法律

生活技術領域：レタリング、アートフラワー、手編み、イタリア刺しゅう、ろうけつ染め、七宝彫金、レザー・クラフト、きもの着付、料理（基礎料）

趣味領域：油絵、デッサン、日本画、かな書道、囲碁、生け花（草月流）、裏千家、宝生流（謡曲仕舞）、ソシアルダンス、ギター、バレエ美容体操

つまり、二九科目への参加者にたいして調査を実施し、計二八四名からの回答を得たわけである。

(1) 参加の実態

最初に今回の調査の対象となった二八四名について、どのような人が、どのようにこの「朝日カルチャセンター」での学習機会に参加しているかをながめておこう。

参加をしている人についてであるが、性別では男性が一割、女性が九割というのがだいたい分布となっている。年代別では、もっとも多いのが四十才代後半（一七・六％）

であり、四十才代前半（一五・八％）、五〇才代（一四・四％）がそれについている。これに六十才以上の七・七％を加えると四十才以上の人が半数以上を占めていることになる。そのほかの年代としては、二十才代の前半・後半、三十才代の後半の人が多いが、三十才代の前半の人が少ないのが目立っている。手のかかる小さい子どもを持っている年代の故であらう。

学歴の面では大学程度の学歴を有している人が半数ぐらゐとなっており、高校（旧制中学・高女も含めて）程度の人とはほぼ同じくらいとなっている。義務教育程度の学歴の人はきわめて少ない。総じて、かなり高い学歴の持ち主が参加しているといえそうである。職業については、女性が圧倒的に多いことを反映して、主婦が半数を超えている。職業に就いている人の中では、専門職、事務職がいずれも一割ほどを占めている。他の職業の人はこれにくらべて少ないが、なかでも労務職の人たちはとくに少なくなっている。主婦の人たちの場合、夫の職業を見てみると、管理職がもっとも多く、専門職がそれについて多い。この両者を合わせると、ここに参加している主婦一〇人のうち八人ぐらゐは、管理職もしくは専門職の妻ということになっている。これらを総合してみると、学歴でも、生活程度でもかなり高い水準にあるホワイトカラー層が中心であり、中でも

その主婦が多くを占めている、ということになりそうである。

学 歴 別	実数	比率
義務教育程度	10	3.5
新制高校程度	125	44.0
大 学 程 度	137	48.3
不 明	12	4.2
計	284	100.0

年 令 別	実数	比率
20才以下	1	0.4
20～24才	35	12.3
25～29才	34	12.0
30～34才	19	6.7
35～39才	34	12.0
40～44才	45	15.8
45～49才	50	17.6
50 才 代	41	14.4
60 才 代	22	7.7
無 記 入	3	1.1
計	284	100.0

性 別	実数	比率
男	29	10.2
女	250	88.0
無記入	5	1.8
計	284	100.0

職業別	実数	比率
事務職	28	9.9
労働職	3	1.1
管理職	14	4.9
専門職	31	10.9
自営業	12	4.2
販売職	6	2.1
主婦	156	54.9
無職	30	10.6
不明	4	1.4
計	284	100.0

(主婦の) 夫の職業	実数	比率
事務職	9	5.8
労働職	0	—
管理職	83	53.2
専門職	32	20.5
自営業	20	12.8
販売職	4	2.6
不明	8	5.1
計	156	100.0

そういった人たちがセンターの学習機会に参加している面の実態を記してみよう。まず参加している科目数であるが、一科目のみに参加している人が八割で、二科目以上参加している人は二割以下である。そして、同様に約八割の人が今回（四十九年一〇月から五十年四月までの学期）始めて参加をした人たちである。前章で記したとおり、「朝日カルチャーセンター」の発足は昭和四十九年四月であり、

今期は第二期に当るわけであるが、一五％の人は同一科目への連続しての参加であり、科目の移動も加えると二割の人が引き続いての参加者ということになる。

参加経験	実数	比率
初めて参加	223	78.6
中断後再び参加	14	4.9
引き続き参加	43	15.1
不明	4	1.4
計	284	100.0

科目	実数	比率
1 科目	226	79.6
2 科目	41	14.4
3 科目	14	4.9
無記入	3	1.1
計	284	100.0

参加科目数を男女別に見ると、約八割の人が一科目に参加していることは共通であるが、女性の場合は残りの大部分の人は二科目への参加であるのに対して、男性の場合は二科目に出席している人は少なく、多くの人が三科目に

性別 参加科目数	男	女
1 科目	82.8	79.2
2 科目	3.4	15.6
3 科目	13.8	4.0
不明	—	1.2
計	100.0	100.0

出席しているという面白い傾向がみられる。男性の三科目出席者の半数は六〇才以上の人であるが、時間的・経済的に恵まれた高令者の姿が想像される。

これらの人々が参加した科目を、語学、一般教養、生活技術、趣味の四領域にまとめてそれぞれへの参加数を見ると、語学領域への参加者がやや（この調査対象者の中では）他の三領域にくらべて少なくなっている。他の三領域の場合はいずれも一〇〇名前後ではほぼ同じくらいになっている。（尚、この表の合計が二八四を超えるのは二科目以上に参加している人がいるからである。

参加領域		実数	比率
語学	学	20	7.0
一般教養		107	37.7
生活技術		97	34.1
趣味		93	32.7

(M. A)

これを男女別に見てみると、Ⅱ—1表のとおりである。語学関係の科目に参加した人は男女が半々となっているが、他の三領域はいずれも女性の参加者が多く、なかでも生活技術と趣味の場合は圧倒的に女性が多くを占めこの二つの領域に男性が参加することはごくまれなことだ、ということになりそうである。

人間の側から見たいかたをすれば、この朝日カルチャースセンターに参加している男性は語学と一般教養の科目に参加している場合が多く、女性の場合は、一般教養、生活

表Ⅱ—1

	語学	一般教養	生活技術	趣味
男	10	12	1	7
女	10	94	93	85
不明	0	1	3	1
計	20	107	97	93

技術および趣味の三領域にわたって参加し、語学への参加者は、女性の中では、少数派といつてよさそうである。

年令との関係を見ると二十才前半では七割もの人が生活技術の領域に集中しているのが目立つ現象である。また、四〇才代前半の人の場合に約半数の人が一般教養の領域に参加しているが他の三領域にも相当程度の比率で参加しており、他の年代にくらべて、関心の巾がいくらか広いといえそうである。領域の視点から見ると、語学の場合は二十才代後半と四十才代前半の人に関心が強いこと、一般教養の場合は三十才後半以降の年令の人が、それ以前の、比較的若い層にくらべて関心が強いこと。まったく逆に、生活技術の場合は三十才代後半以降の人の場合関心が弱いこと、そして、趣味の場合はとくにこれといった傾向はみられず、どの年代にも相当程度の参加者がいること、などがうかがえる。

また、学歴との関係としては表Ⅱ—3および表Ⅱ—4に見られるように、語学および一般教養への参加者の中には大学卒程度の学歴の人がもっとも多く、（とくに語学の場

合にいちぢるしい）生活技術、趣味の場合は新制高校程度の学歴の人が大卒を上廻っている。しかし、語学を除く三領域ではその差はあまり大きくない。

各学歴段階の視点から見ると、生活技術および趣味の二つの領域の場合は、学歴段階が高くなるにつれて参加が低くなるという傾向が見られる。それにたいして、語学の場合は大学卒が中心であり、一般教養の場合は、三つの学歴段階による差はほとんど見られないといつてよさそうである。

表Ⅱ—2

	語学	一般教養	生活技術	趣味	計
20～24才	3.2	12.9	74.2	29.0	119.3
25～29才	14.7	20.6	41.2	32.4	108.9
30～34才	5.3	21.1	42.1	47.4	115.9
35～39才	8.8	38.2	29.4	32.4	108.8
40～44才	15.6	51.1	20.0	24.4	111.1
45～49才	4.0	40.0	28.0	46.0	118.0
50才代	2.4	51.2	26.8	29.3	109.7
60才代		54.6	22.7	22.7	100.0

(2科目以上への参加があるため、計が100%を超える。)

そういう人々がそれぞれの教室に参加しているのとはどういう意味を持っているのかを聞いてみると、表Ⅱ—5のようになっている。語学および一般教養の領域に属する科目に参加している人は圧倒的に大部分の人が知識欲の充足にあると答えている。生活技術および趣味の科目に参加している人の中にも知識欲の充足と答えている人が多いが、余暇の活用という意味を持っているとする人の比率が、語学・一般教養の科目に参加した人にくらべるとあきらかに

表Ⅱ—3

	語学	一般教養	生活技術	趣味	計
義務教育程度		40.0	50.0	50.0	140.0
新制高校程度	3.2	37.6	36.0	35.2	112.0
大学程度	11.7	37.2	31.4	29.2	109.5

(計が100%を超えるのは2科目以上の参加があるため)

表Ⅱ—4

	語学	一般教養	生活技術	趣味
義務教育程度		3.8	5.3	5.5
新制高校程度	19.0	44.8	47.9	48.3
大学程度	76.2	48.5	45.7	44.0
無回答	4.8	2.9	1.1	2.2
計	100.0	100.0	100.0	100.0

表Ⅱ—5

参加領域 参加意味	語学	一般教養	生活技術	趣味
余暇の利用	20.0	7.5	39.2	33.3
知識欲の充足	95.0	93.5	56.7	59.1
健康法の一つ	0	5.6	6.2	7.5
仕事の一部	0			2.2

宅を出てから用足しをすませてからセンターへという型が一割という様子になっている。その所要時間をみると、三十分～一時間という人が約半数ととも多く、十六分～三十分の人と、一時間～二時間の間の人がいずれも二割程度でそれについている。二時間以上という人はさすがにきわめて少なくなっており、二時間の線が最大限のようである。出席状況はたいへんよく、四分の一の人は皆出席、残りの人も大部分はほとんど出席したと答えている。出席する時間を相当無理をして作っている人が一六%いることを考えると、その熱意はかなり高いと見てもよいように思

多くなっている。それぞれの科目の性格から見て当然ともいえるが、面白い現象であるといえよう。

次に、出席することに関連するいくつかの実態に触れておこう。センターへ来るまでの経路としては自宅からセンターへ直行という型が約七割でもっとも多くなっている。そのほかでは職場から直行が約二割、自

表Ⅱ—6

経路	自宅→センター	職場→センター	自宅→用 たし→セ ンター	職場→用 たし→セ ンター	その他	無回答	計
実数	199	51	29	—	4	1	284
比率	70.0	18.0	10.2	0	1.4	0.4	100.0
所要時間	15分以内	16～30分	31～60分	61～120分	121分 以上	無回答	計
実数	17	53	154	57	3	—	284
比率	6.0	18.7	54.1	20.1	1.1	—	100.0
出席状況	皆出席	ほんの少し 休んだ	半々ぐら い	欠席がち	無回答	計	
実数	72	203	6	2	1	284	
比率	25.4	71.4	2.1	0.7	0.4	100.0	
出席の 度 出 席 の 難 度	相当無理 して作っ ている	あまり苦 労してい ない	全く苦労 してい ない	計			
実数	47	173	64	284			
比率	16.5	61.0	22.5	100.0			

われる。

これらの傾向を男女の別にしてみると、自宅からの直行型は女性の場合は七一・二%にたいして男性は五八・六%と少なく、職場からセンター直行は、実数の関係から当然であるが、男性の方が率が高い。(尚、男性の自宅からの直行型には高年齢が多い)又、所要時間では、六十一分以上かかる人が男性では二七・六%、女性では二〇・四%であり、女性の方が遠い所から来るのに制約があることが知れる。出席状況の面では、

表Ⅱ-7

性別 経路	男	女
自宅→センター	58.7	71.2
職場→センター	31.0	16.8
自宅→用たし→センター	10.3	10.4
職場→用たし→センター	—	—
無 回 答	—	1.6
計	100.0	100.0

表Ⅱ-8

性別 所要時間	男	女
15分以内	3.4	6.0
16~30分	24.1	18.4
31~60分	45.0	55.2
61~120分	24.1	19.6
121分以上	3.4	0.8
計	100.0	100.0

いるわけである。出席することの時間を作る苦勞は男女の

皆出席の比率が男性は二〇・七%、女性は二六・〇%である。男性の場合は仕事関係で出席できなかったことなどが考えられるが、とにかく女性の方が出席率が良くなって

表Ⅱ-9

性別 出席状況	男	女
皆 出 席	20.7	26.0
ほんの少し 休んだ	79.3	70.8
半々ぐらい	—	2.4
欠席がち	—	0.4
無 回 答	—	0.4
計	100.0	100.0

あいだに差はないようである。

出席の状況と年齢との関係をもてみると、皆出席者の比

表Ⅱ-10

出席状況 年齢	皆出席	ほんの 少し 休んだ	半々 ぐらい	欠 席 が ち	計
20~24才	25.8	74.2	—	—	100.0
25~29才	17.6	79.5	2.9	—	100.0
30~34才	21.1	78.9	—	—	100.0
35~39才	35.3	58.9	2.9	2.9	100.0
40~44才	24.4	75.6	—	—	100.0
45~49才	22.0	72.0	6.0	—	100.0
50才代	29.3	68.3	2.4	—	100.0
60才代	27.3	72.7	—	—	100.0

率がもっとも高いのは三〇才代後半の人たちであり、もっとも低いのは二〇才代後半となっている。三〇才代後半よりはやや低率ではあるが、五〇才代、六〇才代という高年齢層の場合も出席率が高いことが目立っている。

(2) 参加にかかわる意識・心理

a 参加理由

前節で見てきたような参加の実態が生ずるまでには、いろいろなプロセスが介入していることが考えられるわけであるが、次に、主として参加者自身の意識の側面を主として、参加実態にかかわるいくつかの点を眺めておくこととしたい。

まず、ここに参加するようになったきっかけであるが、記事及び広告の両者を含めて、新聞紙上でこのセンターのことを知ったことをあげている人が八割ほどでもっとも多く、人から聞いてという人が約一割である。この場合の新聞というのは具体的には朝日新聞であると見て差しつかえないであろう。

そのようなきっかけでこのセンターのことを知ったわけであるが、実際に参加をしようと思いついた理由としてもっとも強いものは「日頃やりたいと思っていた内容が学べるから」ということで、これも約九割の人がその理由を第一にあげている。そのほかでは、「講師がいいから」は約

三分の一の人、「場所が便利だから」をあげた人が約二割いる。この三つが参加させた理由のベスト・スリーといえるが、内容と講師は不可分なものと考えれば内容がこれらの人を惹きつけており、それに加えて、場所も幸いしている、ということになるだろう。

これは参加したい気持ちを起させた理由にあてはまるものを二つまであげてもらったものの数字であるが、とくに強い理由として一つだけあげてもらった場合も傾向としては同じである。表Ⅱ-12の右部分がそれであるが、内容が約八割、講師が約一割の人によってあげられている。

表Ⅱ-11

参加のきっかけ	実数	比率
新聞広告を見て	105	37.0
新聞の記事・案内を見て	134	47.1
新聞以外の広告・案内を見て	3	1.1
人から教えられて	28	9.9
パンフレットを見て	10	3.5
その他	4	1.4
計	284	100.0

表Ⅱ-12

参加理由	参加した理由	実数	比率	実数	比率
イ	日頃やりたいと思っていた内容が学べるから	258	91.0	221	78.0
ロ	場所が便利だから	53	19.7	10	3.5
ハ	環境が魅力的だから	13	4.6	1	0.4
ニ	講師がいいから	96	33.8	34	12.0
ホ	日新しい内容だから	10	3.5	4	1.4
ヘ	時間があいているから	28	10.0	12	4.2
ト	新聞社の事業だから	8	2.8	2	0.7
チ	会員になるといろいろな特典があるから	2	0.7	0	—
リ	人にさそわれて断れなかったから	1	0.4	0	—

(複数回答) (強い理由)

参加する気持ちを起させたものとも強い理由として一つだけあげてもらったものを性別にしてみると、男女に共通して、「日頃やりたいと思っていた内容が学べるから」を約

表Ⅱ-13

参加理由	性別	
	男	女
イ	79.4	77.6
ロ	3.4	3.6
ハ	—	0.4
ニ	3.4	12.8
ホ	—	1.6
ヘ	13.8	3.2
ト	—	0.8
チ	—	—
リ	—	—
計	100.0	100.0

八割の人があげているほか、男性の場合は「時間があいているから」が多い。(この半数の人が六〇才以上の人である)一方、女性の場合は、「講師がいいから」をあげている比率が男性にくらべて高くなっている。女性心理の一面を示すものであろう。

これを年代別に見てみると表Ⅱ-14のとおりである。どの年代でも、日頃やりたかった内容だからをあげている人が七〇八割以上の多数を占めていることが共通した傾向となっている。これについては講師がいいからをあげている世代が多いが二〇才代と六〇才代では時間があいているからという理由の方が高率を占めていることが注目される。さらに、参加した領域との関係を見ると、「場所が便利だから」をもっとも強い理由としてあげた人は生活技術と趣味の関係の科目に参加した人の中に相対的に多いこと、

表Ⅱ-14

参加理由	年代							
	20～24才	25～29才	30～34才	35～39才	40～44才	45～49才	50才代	60才代
イ	77.3	76.6	73.6	85.4	82.3	76.0	73.3	77.3
ロ	6.5	5.9	5.3	2.9		8.0		
ハ							2.4	
ニ	6.5	5.9	21.1	5.9	13.3	12.0	17.1	13.6
ホ		2.9		2.9	2.2		2.4	
ヘ	9.7	9.7			2.2	4.0	2.4	9.1
ト				5.9			2.4	
チ								
リ								
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表Ⅱ-15

参加理由	参加領域	語学	一般教養	生活技術	趣味
イ		75.0	84.2	75.3	72.0
ロ		—	0.9	7.2	4.3
ハ		—	—	—	1.1
ニ		15.0	8.4	7.2	21.5
ホ		—	2.8	1.0	—
ヘ		10.0	3.7	7.2	—
ト		—	—	2.1	1.1
チ		—	—	—	—
リ		—	—	—	—
計		100.0	100.0	100.0	100.0

“講師”をあげた人は語学と趣味に多いこと、“時間があ
いているから”は語学に多いことなどが目立っている。最
後の点は別にして、それぞれの科目の特長がいくらか示さ
れているといえそうである。

参加理由
イ 日頃やりたいと思っていた内容が学べるから

ロ 場所が便利だから

ハ 環境が魅力的だから

ニ 講師がいいから

ホ 日新しい内容だから

ヘ 時間があいているから

ト 新聞社の事業だから

チ 会員になるといろいろの特典があるから

リ 人にさそわれて断れなかったから

表Ⅱ-16

参加意味 年令	余暇の 活用	知識欲 の充足	健康法 の一つ	労働(仕 事)の一 部	無回答
20才以下	—	—	—	—	—
20～24才	51.4	40.0	—	—	8.6
25～29才	17.6	79.4	—	—	2.9
30～34才	42.1	57.9	5.3	5.3	—
35～39才	20.6	76.5	5.9	—	—
40～44才	15.6	84.4	6.7	—	—
45～49才	22.0	64.0	6.0	2.0	4.0
50才代	19.5	78.0	9.8	—	—
60才代	—	—	—	—	—

参加した気持ちを自分にとってどういう意味のものとして受けとめているかという角度から、「余暇の活用」「知識欲の充足」「健康法の一つ」及び「労働(仕事)の一部」という四つに分けてみると、総体的に「知識欲の充足」を求めて参加している人が、二〇才後半以上の年代のすべてにおいて多くなっている。その中で二〇才代前半の若い層だけは「余暇の善用」をあげている人が「知識欲の充足」

表Ⅱ-17

参加時 期待	実数	比率
イ	128	45.1
ロ	34	12.0
ハ	7	2.5
ニ	42	14.8
ホ	49	17.3
ヘ	8	2.8
ト	28	10.0
チ	7	2.5
リ	13	4.6

期待
イ 生活を楽しくすることに役立つだろう
ロ 社会的な視野を広げることになるだろう

を求めている人を上廻っているのが目につく。この年代の人の中には、アート・フラワー、刺しゅう、ろうけつ染めといった生活技術の領域の科目への参加がとくに高いことがその理由のようである。また、五〇才代、六〇才代では「健康法の一つ」として出席している人がそれ以下の年代にくらべるとやや多くなっている。

参加するに当っては、半数近くの人が「生活を楽しむことに役立つだろう」ということを期待し、「人生観を確かにすることができよう」「職業に役立つ知識・技術を身につけられるだろう」そして又、「社会的な視野を広げることになるだろう」といったことへの期待も一〇二割ぐらいの人の抱いた期待のようである。新しい友人がふえること、家庭をよりよくすることなどの期待は少なくなっている。

表Ⅱ-18

	語 学	一 般 教 養	生 活 技 術	趣 味
生活を楽しむ	20.0	23.4	67.0	58.1
社会的視野	15.0	—	1.0	2.2
友人	5.0	1.9	5.2	—
職業	30.0	15.9	9.3	1.1
人生観	5.0	31.8	9.3	1.1
家庭	—	2.8	7.2	2.2
余暇	15.0	7.5	14.4	3.2
とくになかった	10.0	2.8	2.1	—
資格	—	1.9	4.1	—

それぞれが参加した領域との関係で見ると、生活を楽しむことに役立つだろうという期待をもって参加したのは生活技術と趣味の領域の科目に参加した人の中には多い

ハ 新しい友人がふえるだろう
ニ 職業に役立つ知識・技術を身につけられるだろう
ホ 人生観をたしかにすることができよう
ヘ 家庭をよりよくするのに役立つだろう
ト 余暇を有効に過ごすことができるだろう
チ とくにこれといった期待をもっていなかった
リ 資格(段・級を含む)をとる準備になるだろう

が、それにくらべると、語学と一般教養の領域の科目に参加した人の中には比較的少ない。これと逆の傾向を示しているのが社会的な視野を広げることになるだろうという期待と、職業に役立つ知識・技術を身につけられるだろうという期待を持って参加した人は語学と一般教養の領域の科目に参加した人の中に多くなっている。そのほかでは、一般教養の科目に参加した人の中に、人生観をたしかにすることができようという期待をもって参加した人が多いことが目立った現象である。

b 期待充足感・満足感

参加した人が、参加するにあたって持った期待は、六カ月の期間の終了が近い時点でかなり高い充足感を与えている、といえそうである。充分かなえられたという人が三分の一ぐらいおり、まあかなえられているという人が五割を超えているからである。

期待が充分かなえられていると思っているのは男女とも三分の一前後であり変りはない。まあかなえられているというのは五九%・四五%とやや男性の方が多くなっている。充分かまああかの程度のちがいはあっても、期待充足感を感じている比率は男性の方が高いのにたいして、あまりかなえられていないとする人、ほとんどかなえられていないとする人、さらには何ともいえないと消極的な反

表Ⅱ—19

期待充足感	実数	比率
充分かなえられている	92	32.4
まあかなえられている	157	55.3
あまりかなえられていない	15	5.3
ほとんどかなえられていない	2	0.7
何ともいえない	14	4.9
無 回 答	4	1.4
計	284	100.0

応をする人の比率はいずれも女性の方が高くなっている。概して、女性の方があらかじめ持っていた期待とのあいだのズレをより強く感じている、といえそうである。

表Ⅱ—20

性別 期待が	男	女
充分かなえられている	34.5	31.6
まあかなえられている	58.7	45.2
あまりかなえられていない	3.4	5.6
ほとんどかなえられていない	—	0.8
何ともいえない	3.4	5.2
無 回 答	—	0.6
計	100.0	100.0

この期待充足感をもう少しいくつかの角度から分析をし

てみると、参加した領域ではどの領域でも、一〇%前後が（語学の場合は一五%が）消極的な反応を示していることから、あまり差はないといえるが、年令とはいくらかの関係がありそうである。すなわち、年令ではどの段階でも「まあかなえられている」としている人がもとも高率であることは共通の傾向となっているが、「充分かなえられている」という人の比率を見ると、四十五才以上の人たちでは四割以上の高率となっており、それ以下の年令層の人たちとのあいだには明らかな差が見られる。二十五～二十九才の人たちは、「充分かなえられている」の率ももとも低率であり、逆に、「あまりかなえられていない」と思っている人の比率がきわ立っており、不満足な感じを抱いている層といえそうである。そして、これは先に記した出席状況において皆出席の率ももとも低いこととも関連があると思われる。

ここに参加したことによって、生活の中で変った点としてもっとも多くの方があげているのは「家庭での楽しみがふえた」ことであり、六割近くの方があげている。これについて多いのは、「時間の使い方が規則的になった」ことと、「社会的な視野が広がった」ことであり、いずれも半数近くの方がそれをあげている。この三点以外はいずれの場合も、変化があったことを否定する比率の方が肯定す

る比率よりも高い。したがって、セクターが参加者に与えた影響の具体的なものとしては上記三点があげられるとい

表Ⅱ—21

年令 期待が	オ 20～24	オ 25～29	オ 30～34	オ 35～39	オ 40～44	オ 45～49	オ 50才代	オ 60才代
充分かなえられている	25.8	17.6	21.1	23.5	26.7	42.0	46.3	45.5
まあかなえられている	67.8	56.0	47.2	64.9	60.0	50.0	48.8	45.5
あまりかなえられていない	3.2	14.7	5.3	2.9	4.4	6.0	4.9	—
ほとんどかなえられていない	—	—	5.3	2.9	—	—	—	—
何ともいえない	3.2	8.8	21.1	2.9	6.7	2.0	—	4.5
無 回 答	—	2.9	—	2.9	2.2	—	—	4.5
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表Ⅱ—22

変 化	実数	比率
人とのつきあい方	71	25.0
新 聞 の 見 方	61	21.5
テ レ ビ の 見 方	52	18.3
仕事が楽しくなった	85	30.0
家庭での楽しみが増えた	165	58.1
人生についての考え方	81	28.5
時 間 の 使 い 方	134	47.3
社 会 的 視 野	129	45.4

うことになるだろう。

参加領域との関係を見ると、語学領域の科目に参加した人の中には、社会的な視野が広がったという変化を感じている人は多いのにたいし、テレビの見方という面での変化は少ないようである。一般教養領域の科目に参加した人の中では、新聞の見方、テレビの見方、人生についての考え方、社会的視野の広がりなどの面での変化を感じる人が多く見られる。つぎに、生活技術の領域では、人とのつきあい方、テレビの見方、仕事を楽しむようになった、家庭での楽しみがふえた、時間の使い方が規則的になったという面での変化を多くの人があげている。また、趣味の領域の場合は仕事を楽しむようになった、家庭での楽しみがふえたことが大きな

変化となつてゐるものようである。それぞれの領域の特色とのかかわりがかなり示されているものといつてもよさそうである。

表Ⅱ-23

参加領域 変化が起つた	語 学	一 般 教 養	生 活 技 術	趣 味
人とのつきあい方	20.0	23.4	33.0	21.5
新聞の見方	10.0	29.0	23.7	15.1
テレビの見方	5.0	25.2	21.6	14.0
仕事が楽しくなった	15.0	27.1	34.0	34.4
家庭での楽しみがふえた	30.0	44.9	79.4	66.7
人生についての考え方	20.0	35.5	27.8	25.8
時間の使い方	45.0	45.8	62.9	38.7
社会的視野	50.0	57.0	38.1	39.8

これを男女の別にみると、社会的視野が広がつたといふ変化を意識している人は男性の方が女性にくらべて多くなつてゐる。人とのつきあい方という点では男女ともほぼ同じくらいの率であるが、それ以外の点ではすべて女性の方が変化したと感じている比率が高くなつてゐる。

表Ⅱ-24

性別 変化が起つた	男	女
人とのつきあい方	24.1	24.4
新聞の見方	13.8	22.0
テレビの見方	13.8	18.8
仕事が楽しくなった	20.7	30.8
家庭での楽しみがふえた	37.9	60.4
人生についての考え方	20.7	29.2
時間の使い方	24.1	50.4
社会的視野	58.6	44.0

前に見たように非常に高い出席率からもうかがえることであるが、多くの参加者はセンターでの学習に満足感を得てゐるようであり、とくに高い満足感を得ている人が全体の二割に及んでゐる。

表Ⅱ-25

満足感 (全体)	実数	比率
たいへん満足している	58	20.4
まあまあ満足している	193	68.0
あまり満足していない	17	6.0
何ともいえない	16	5.6
計	284	100.0

表Ⅱ-27

学歴 満足感 (全体)	義務教育段階	中等 "	高等 "
たいへん満足している	30.0	24.0	16.1
まあまあ満足している	60.0	62.4	73.8
あまり満足していない	—	8.8	3.6
何ともいえない	10.0	4.8	5.8
無 回 答	—	—	0.7
計	100.0	100.0	100.0

表Ⅱ-26

性別 満足感 (全体)	男	女
たいへん満足している	13.8	21.6
まあまあ満足している	72.4	66.8
あまり満足していない	6.9	6.0
何ともいえない	6.9	5.6
計	100.0	100.0

これを属性の点から眺めてみると、以下の三つの表でわかるように、男性よりは女性の方が満足感を強く感じ、年令的には四十五才以上の高年令層がそして学歴との関係ではより低い学歴水準の人が、強い満足感を多く示している、ということになっている。

参加領域との関係を見ると、どの領域の科目に参加した人でもそれなりの満足感を感じているといえる。とくに強

表Ⅱ-28

年令 満足感 (全体)	20才以下	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50才代	60才以上
たいへん満足している	—	6.5	11.8	15.8	20.6	11.1	32.0	29.3	31.8
まあまあ満足している	—	83.8	70.5	73.7	67.7	75.6	62.0	61.0	41.0
あまり満足していない	—	3.2	11.8	—	2.9	8.9	2.0	7.3	13.6
何ともいえない	—	6.5	5.9	10.5	8.8	4.4	4.0	2.4	9.1
無 回 答	—	—	—	—	—	—	—	—	4.5
計	—	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

く満足感を感じている人は表Ⅱ—29にあるように、語学及び一般教養の場合より、生活技術及び趣味の領域に参加した人の方がいくらか多いようである。おおまかにいって、生活技術および趣味の参加者が語学および一般教養の参加者よりも学歴段階がやや低いことと関連しているのかもしれない。

表Ⅱ—29

参加領域 満足感 (全体)	語学	一般教養	生活技術	趣味
たいへん満 足している	15.0	17.8	21.6	20.4
まあまあ満 足している	70.0	71.0	66.0	71.0
あまり満 足していない	5.0	6.5	7.2	2.2
ほとんどい えな	10.0	4.7	5.2	5.4
無 回 答	—	—	—	1.0
計	100.0	100.0	100.0	100.0

また、センターの教室に参加した意味との関連でみると、知識欲の充足を求めて参加した人の中に、余暇を活用したいということから参加した人よりも高い満足感を感じている人が多いことが注目される。漠然とした気持ちからでなく、積極的な姿勢で参加することが得るものを大きく

させるといふことのようにも思われる。

表Ⅱ—30

参加意味 満足感	余暇の活用	知識欲の充足
たいへん満 足している	12.3	21.1
まあまあ満 足している	75.4	66.6
あまり満 足していない	5.5	6.4
ほとんどい えな	6.8	4.9
計	100.0	100.0

参加領域との関係では、生活技術・趣味の領域の科目に参加した人の中に、たいへん満足しているという率が、他の二領域にくらべて、やや高いようであるが、それほど大きな差であるとはいえない。

満足感をもう少しこまかい角度から眺めてみよう。内容、講師、設備、雰囲気(全体的な環境)及び経費という五つの側面に分けてそれぞれについての満足感を聞いてみると、強い満足感をもっとも多くの人に与えているのは講師であり、六割もの人がたいへん満足していると答えている。内容、雰囲気、設備の面については、強い満足感では講師の面にくらべていくらか低い比率となっているが、まあまあ満足しているというものまで含めての比率としては、設備の面が約八割と一寸低いが、他の三つの面はいずれも約九

表Ⅱ—31

満 足 感 (各部分)	内 容		講 師		設 備		雰 囲 気		経 費	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率
たいへん満足している	122	43.0	171	60.3	90	31.7	94	33.1	20	7.0
まあまあ満足している	136	47.8	89	31.3	135	47.5	147	51.8	105	37.0
あまり満足していない	14	4.9	12	4.2	41	14.4	22	7.7	115	40.5
何ともいえない	7	2.5	6	2.1	9	3.2	12	4.2	38	13.4
無 回 答	5	1.8	6	2.1	9	3.2	9	3.2	6	2.1
計	284	100.0	284	100.0	284	100.0	284	100.0	284	100.0

割でありあまり差はみられない、といえる。満足感が少ない唯一の面は経費に関するものである。たいへん満足しているという人は一割弱、まあまあという人が四割弱そして、約四割の人があまり満足していない、という結果になっている。受講料の額から見て、やむをえない数字というべきであらうか。

これらを性別・年代別などにしてみると、表Ⅱ—32から表Ⅱ—36のようになっていいる。たいへん満足しているという比率が女性よりも男性の方が高いのは講師に関してのみで、他はいずれも女性の方が強い満足感を持っている。とくに、設備と雰囲気については男性の不満が高いようである。

年代別では、どの年代においても講師にたいしての満足感をもっとも強く、経費にたいしてがもっとも低いことが共通の傾向となっている。

そのほか、いくらか目立った傾向としては次のようなものがみられる。

- ・内容についてあまり満足していない人が四〇才代前半の人の中にやや多い。
- ・設備への否定的な反応は三十五才～四十四才の人の中に少ない。
- ・全体的な雰囲気はたいへん満足している人が四〇才代

表Ⅱ—32

(内容)	男	女	オ 20～24	オ 25～29	オ 30～34	オ 35～39	オ 40～44	オ 45～49	50才代	60才代
たいへん満足している	41.4	43.2	32.3	38.2	52.6	35.3	33.3	54.0	43.9	59.1
まあまあ満足している	55.2	46.8	54.8	53.0	42.1	56.0	51.2	44.0	51.1	18.2
あまり満足していない	3.4	5.2	9.7	5.9	—	2.9	11.1	—	2.5	9.1
何ともいえない	—	2.8	3.2	2.9	5.3	2.9	2.2	2.0	2.5	—
無 回 答	—	2.0	—	—	—	2.9	2.2	—	—	13.6
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表Ⅱ—33

(講師)	男	女	オ 20～24	オ 25～29	オ 30～34	オ 35～39	オ 40～44	オ 45～49	50才代	60才代
たいへん満足している	62.1	59.6	58.1	61.8	68.3	53.0	48.9	70.0	58.5	59.2
まあまあ満足している	37.9	31.2	35.5	26.5	21.1	41.2	42.2	28.0	36.6	13.6
あまり満足していない	—	4.4	3.2	8.8	5.3	—	6.7	—	4.9	4.5
何ともいえない	—	2.4	3.2	2.9	5.3	2.9	—	2.0	—	4.5
無 回 答	—	2.4	—	—	—	2.9	2.2	—	—	18.2
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表Ⅱ—34

(設備)	男	女	オ 20～24	オ 25～29	オ 30～34	オ 35～39	オ 40～44	オ 45～49	50才代	60才代
たいへん満足している	20.7	32.8	32.3	26.5	36.8	29.4	33.3	38.0	29.3	18.2
まあまあ満足している	51.8	46.8	51.6	47.0	36.8	58.9	51.2	46.0	48.8	31.8
あまり満足していない	24.1	13.6	12.9	26.5	21.1	8.8	8.9	10.0	14.6	22.7
何ともいえない	—	3.6	3.2	—	5.3	—	4.4	6.0	4.9	—
無 回 答	3.4	3.2	—	—	—	2.9	2.2	—	2.4	27.3
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表Ⅱ—35

(雰囲気)	男	女	オ 20～24	オ 25～29	オ 30～34	オ 35～39	オ 40～44	オ 45～49	50才代	60才代
たいへん満足している	27.6	33.6	22.6	29.4	21.1	32.4	28.9	44.0	51.2	13.6
まあまあ満足している	58.7	50.8	51.5	61.8	57.8	61.8	42.2	48.0	41.5	45.5
あまり満足していない	10.3	7.6	3.2	5.9	21.1	—	17.8	4.0	2.4	13.6
何ともいえない	3.4	4.4	6.5	2.9	—	2.9	8.9	4.0	4.9	27.3
無 回 答	—	3.6	3.2	—	—	2.9	2.2	—	—	—
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表Ⅱ—36

(経費)	男	女	オ 20～24	オ 25～29	オ 30～34	オ 35～39	オ 40～44	オ 45～49	50才代	60才代
たいへん満足している	6.9	7.2	6.5	2.9	10.5	5.9	—	14.0	9.8	9.0
まあまあ満足している	37.9	36.4	48.3	29.4	26.3	41.2	31.1	34.0	46.3	27.3
あまり満足していない	41.4	40.4	38.7	44.2	47.4	38.2	60.0	38.0	26.8	27.3
何ともいえない	13.8	13.6	6.5	23.5	15.8	11.8	6.7	14.0	17.1	18.2
無 回 答	—	2.4	—	—	—	2.9	2.2	—	—	18.2
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表—Ⅱ37

	内 容	講 師	設 備	雰 囲 気	経 費
義務教育程度	40.0	70.0	50.0	50.0	20.0
新制高校程度	42.4	60.8	33.6	35.2	8.0
大 学 程 度	43.8	59.1	29.9	29.9	5.8

後半から五〇才代の人に多い。

・経費に関して、五〇才代、六〇才代の人には不満を表明している人が少ない。

このほか、学歴および参加領域の二つの角度から触れてみよう。頻を避けるため、とくに高い満足感を示した比率だけをとり出して表にしたのが表Ⅱ—37および表Ⅱ—38である。

まず学歴との関係であるが、内容の点を除いて講師、設備、雰囲気、経費のどの点においても、学歴段階の低いほど、より高い満足感を示していることが目につく。内容の点についてだけは学歴段階の高い層ほど強い満足感の比率が高くなっている。学歴の高い層は内容については満足しているが、その他の点については満足感が弱いということであろうか。

さいごに、参加領域との関係を見てみよう。まず気がつくことは、どの領域の参加者の場合も講師についての満足感がもっとも強いということである。その中でも語学の場合はもっとも高率であり、それにくらべると、一般教養および趣味の場合はやや低率といえそうである。逆に内容および雰囲気との二つの点に関しては、語学の場合が、他の三領域にくらべて強い満足感を示す率が低くなっている。設備に関しては、生活技術および趣味への参加者が語学およ

び一般教養の参加者にくらべてやや満足度が高い、といえそうである。

表Ⅱ—38

	語 学	一般教養	生活技術	趣 味
内 容	20.0	48.6	42.3	39.8
講 師	70.0	57.0	63.9	59.1
設 備	25.0	27.1	34.0	39.8
雰 囲 気	25.0	34.6	33.0	30.1
経 費	0	5.6	8.2	8.6

(3) 学習活動に関連する諸側面

a 公的な学習機会への参加

当センターの受講者のうち、公民館や教育委員会等公的機関が開設した学級や行事などに参加したことがある人が全体でだいたい三分の一ぐらいであるが、男性の場合は二〇%であり、女性にくらべてかなり低率となっており、このような（いわゆる社会教育的な）学習機会への参加が男性の場合には少ないという定説と一致している。

年代との関係としては、三〇才代の後半から四〇才代までの受講者の中には公的な学習機会への参加者が他の年代

表Ⅱ—40

職 業	参加経験		計
	あ り	な い	
事務職	35.7	64.3	100.0
労働職	66.7	33.3	100.0
管理職	7.1	92.9	100.0
専門職	29.0	71.0	100.0
営業	16.7	83.3	100.0
販売職	16.7	83.3	100.0
主婦職	41.7	58.3	100.0
無職	20.0	80.0	100.0

表Ⅱ—39

性・年代	参加の有無		計
	あ り	な い	
男	20.7	79.3	100.0
女	35.2	64.8	100.0
20～24才	3.2	96.8	100.0
25～29才	17.6	82.4	100.0
30～34才	26.3	73.7	100.0
35～39才	52.9	47.1	100.0
40～44才	46.7	53.3	100.0
45～49才	52.0	48.0	100.0
50才代	19.5	80.5	100.0
60才代	40.9	59.1	100.0
全 体	34.5	65.5	100.0

表Ⅱ—41

学 歴	参加経験		計
	あ り	な い	
初等教育段階	30.0	70.0	100.0
中等 "	39.2	60.8	100.0
高等 "	31.4	68.6	100.0

表Ⅱ—42

参加領域	参加有無		計
	あ り	な し	
語 学	25.0	75.0	100.0
一 般 教 養	43.0	57.0	100.0
生 活 技 術	27.8	72.2	100.0
趣 味	36.6	63.4	100.0

b 社会教育観

このように、公的な学習機会への参加はあまり多いとは

外して考えた）
センターの科目に参加して
いる内容領域別に見ると、
一般教養の科目に参加して
いる人の場合がもっとも参加
率が高く、趣味の領域の場合
がそれに付いて、語学及び
生活技術の場合はこれくら
べてやや参加率は低いよう
である。

にくらべるといくらか高くなっている。逆に三〇才以下の
若い層、とくに二〇～二四才の若者の中にはたいへん少
なくなっている。
学歴、職業といった点から見ると、表Ⅱ—40及び表Ⅱ—
41の如くであるが、中等教育段階の人の場合約四〇％で、
他の学歴の人よりもいくらか参加率が高いようである。ま
た、職業別では、主婦の中にはやや（公的学習機会への）
参加者が多いが、他はいずれも低く、管理職の場合とはく
に低い。（尚、労働職の場合
は実数がたいへん少ないので
に低い。）

いえないが、その一般的な理由をこれらの人がどう考えているかを見たのが表Ⅱである。PRが行き届かないのだろうとみている人をもっとも多く、内容がびつたりしないことが多いのだろうという人もほぼ同じくらいいる。当センタ一のPRが朝日新聞という大きな宣伝力をもって行なわれていること、内容にもっとも大きな魅力を感じて多くの人が参加していることを合わせ考えると、非常に対照的な形で評価がされているとみることができると、そのほかでは固苦しい感じを持つからだろうとみている人もかなり多い。

男性と女性とをくらべると、男性の場合は固苦しい感じ、内容の二つを理由として女性よりも強く感じており、女性の場合は施設・設備をあげた率が男性にくらべると高い。また、学歴との関係を見ると、学歴段階の低い層ほど固苦しさを感じており、高い層ほど内容の面により大きな理由を感じているという傾向がみられる。

公的な学習機会に実際に参加したことのある人とならない人のあいだでも、いくらか異なった感じかたがうかがえる。すなわち、実際に参加したことのない人はPRの足りなさをあげている人が多く、逆に、参加経験のある人の場合は固苦しい感じを持つのではないかということをつけている率が、参加経験のない人にくらべると、いくらか高い

表Ⅱ—43

最大理由	全体	男	女	才20～24	才25～29	才30～34	才35～39	才40～44	才45～49	才50才代	才60才代
施設・設備	7.9	3.4	8.4	3.2	14.7	5.2	11.8	11.1	4.0	7.3	4.5
PR	31.5	31.1	31.6	41.8	32.4	31.6	38.3	15.6	30.0	43.9	18.2
固苦しい	20.1	24.1	19.6	22.6	17.6	31.6	14.7	20.0	24.0	9.8	27.3
内 容	28.0	34.6	27.2	19.4	20.6	31.6	29.4	35.6	24.0	31.7	36.5
講 師	6.1	3.4	6.4	6.5	8.8		2.9	13.3	8.0		4.5
そ の 他	2.8	3.4	2.8		5.9		2.9	2.2	4.0	2.4	4.5
無 回 答	3.6	—	4.0	6.5				2.2	6.0	4.9	4.5
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

参加経験のある人を、参加してみても期待がかなえられたという人と、かなえられなかったという人にわけてみると、前者ではP Rに、後者では固苦しさを理由としてあげている率が相対的に高くなっている。公的学習機会にたいして、期待がかなえられたという満足感を感じている人はP Rによってもっと多くの人が参加することを望んでいるという

ようである。

表Ⅱ—44

学 歴 最大理由	初等教育程度	中等教育程度	高等教育程度
施 設・設 備		9.6	7.3
P R	30.0	30.4	31.4
固 苦 し い	30.0	23.2	18.2
内 容	10.0	24.8	31.4
講 師	10.0	4.0	8.0
そ の 他		4.0	2.2
無 回 答	20.0	4.0	1.5
計	100.0	100.0	100.0

C 余暇行動・余暇観
平日と休日別に、いちばんすることが多い種類としてあげられたものが表Ⅱ—及び表Ⅱ—である。平日の場合は新聞・雑誌・読書といった活字との接触、さらには趣味・けいこごとやショッピング・ぶらつきをあげた人が多

表Ⅱ—46

期待が 最大理由	かなえ られた	かなえ られな かった
施設・設備	9.0	7.4
P R	32.7	18.5
固 苦 し い	19.4	25.9
内 容	28.4	25.9
講 師	4.5	7.4
そ の 他	4.5	7.4
無 回 答	4.5	7.4
計	100.0	100.0

表Ⅱ—45

参加経験 最大理由	あり	なし
施設・設備	8.2	7.5
P R	27.6	33.8
固 苦 し い	22.4	19.4
内 容	27.6	27.4
講 師	5.1	6.5
そ の 他	5.1	2.2
無 回 答	4.0	3.2
計	100.0	100.0

ことであろう。

く、それらについてはラジオやテレビの視聴、休息・家庭内のだんらんが多くなっている。このように、平日の余暇行動は比較的分散しているのに対し、休日の場合は休息・だんらんを約半数の人があげ、その他は趣味・ぶらつきがいくらかある程度・集中型になっているのが特長的である。

平日の余暇行動を性別・年代別に見ると、次のような傾向がみとめられる。

- ・社会的な活動は男性の方が多く、逆に女性の方に多いものはラジオ・テレビの視聴、趣味・ぶらつきである。
- ・四〇才代後半と五〇才代の人には休息・だんらんの比率が低い。その代り、前者は新聞・読書、後者はラジオ・テレビの比率が他の年代にくらべて高くなっている。

- ・新聞・読書は二〇才代の比率が低い。

- ・将来のための勉強は女性よりも男性、年代的には三〇才代前半までの若い層の比率が高くなっている。

また、休日の場合としては、次のような傾向がみられる。

- ・女性の場合は休息・だんらん、男性の場合は新聞・読書の比率が相対的に高いものである。

- ・六〇才代の人の中には休息・だんらんをあげた人が少

表Ⅱ—47

余暇(平日)	全 体	男	女	20 ~ 24 才	25 ~ 29 才	30 ~ 34 才	35 ~ 39 才	40 ~ 44 才	45 ~ 49 才	50 才 代	60 才 代
休だ社つテ	13.7	17.2	13.6	9.7	29.5	10.5	14.7	17.8	8.0	9.8	13.6
ん会き	4.6	10.3	3.6	3.2	2.9		2.9	6.7	2.0	7.3	9.1
ら活あ	14.4	6.9	15.6	29.0	11.8	10.5	8.8	11.1	10.0	24.4	9.1
ジレ	27.9	31.2	27.2	19.4	14.7	31.6	20.6	28.9	44.0	26.8	31.9
新聞・読書	0.7		0.8	3.2	2.9						
旅行	0.4		0.4	3.2							
観覧・鑑賞	25.0	10.3	26.4	22.6	23.5	26.3	29.5	22.2	24.0	26.8	27.3
趣味・遊び	5.6	17.2	4.4	9.7	11.8	10.5	5.9	4.4	2.0		4.5
勉強	0.7		0.8			5.3	2.9				
スポーツ	7.0	6.9	7.2		2.9	5.3	14.7	8.9	10.0	4.9	4.5
その他											
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表Ⅱ—48

余暇 (休日)	全 体	男	女	20 ～ 24 才	25 ～ 29 才	30 ～ 34 才	35 ～ 39 才	40 ～ 44 才	45 ～ 49 才	50 才 代	60 才 代
体だ ん会 き ラテ	49.1	34.6	50.8	35.4	50.1	52.5	41.3	69.0	40.0	61.0	31.8
息ん 活あ ジレ	2.5		2.8	9.7	5.9				2.0		
新聞・読書	6.1	3.4	6.4	6.5	8.8		5.9	2.2	8.0	7.3	9.1
旅行	7.5	24.1	5.6	3.2	2.9	5.3	8.8	4.4	10.0	4.9	27.3
観覧・鑑賞	6.1	6.9	6.0	9.7	5.9	10.5	8.8	2.2	10.0	2.4	
趣味	0.7		0.8						2.0	2.4	
勉強	16.8	13.8	17.2	25.8	20.6	21.1	20.6	15.6	12.0	9.8	18.2
スポーツ	2.2	6.9	1.6	6.5	2.9		2.9		4.0		
その他	1.8	3.4	1.6	3.2	2.9	5.3	2.9	2.2			
無記名	7.2	6.9	7.2			5.3	8.8	4.4	12.0	12.2	13.6
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

なく、新聞、読書の比率は他のどの年代よりもかなり高くなっている。

・二〇才前半も、同様に、休息・だんらの比率が低い、しかしこの場合にはそのぶん、趣味・ぶらつきの比率が高くなっている。

余暇（自分で自由に使える時間）が今よりも増えたとしたら、重点的に使いたいものは何かという形で、余暇についての一つの考え方を聞いたものが表Ⅱ—である。表からわかるように、勉強に使いたいというのと、遊びや趣味に使いたいというのが多くの人の答えであり、他はいずれも一〇%以下の比率である。

男性の場合と女性の場合とをくらべると、勉強志向の点では男性が女性を上廻っているのにたいし、副業・アルバイトのために使いたいという気持は女性の方に強い、といえそうである。また、年代別としては、四〇才前半の人の中には遊び志向が弱く、そのぶんだけ副業・アルバイトに使いたいという人の比率が他の年代よりも高くなっている。三〇才前半の人は勉強志向が強いこと、副業志向も二番目に強いこと、そして、この二つに加えて遊び・趣味という三つの面以外のことへの志向が皆無であるというたいへん特長的な傾向を示している。

このように、遊び・趣味と勉強が二大志向であるが、そ

表Ⅱ-49

希 望	全 体	男	女	20 ～ 24 才	25 ～ 29 才	30 ～ 34 才	35 ～ 39 才	40 ～ 44 才	45 ～ 49 才	50 才 代	60 才 代
遊び・趣味	32.4	34.5	32.0	25.8	35.3	31.6	35.3	24.4	36.0	36.6	31.9
勉 強	49.4	58.7	48.8	51.6	44.2	57.9	47.1	51.2	50.0	48.9	50.0
休 養	4.9	3.4	4.8	9.7	5.9		2.9	4.4	2.0	2.4	13.6
副 業	7.7	3.4	8.0	9.7	8.8	10.5	5.9	13.3	6.0	2.4	4.5
家事・家庭 サービス	2.1		2.4		2.9		8.8		2.0	2.4	
そ の 他	2.8		3.2		2.9			6.7	2.0	7.3	
無 回 答	0.7		0.8	3.2					2.0		
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表Ⅱ-51

志 向 行 動	遊 び ・ 趣 味	勉 強
休 息 だ ん ち ん 社 会 活 動 つ き あ い ラ シ レ オ テ ビ	14.1	12.9
新聞・読書	3.3	5.7
旅 行	15.2	15.0
観 覧 ・ 鑑 賞	19.6	32.9
趣 味 ・ 鑑 賞	1.1	
勉 強	1.1	17.9
ス ポ ー ツ	38.0	8.6
そ の 他	1.1	0.7
無 記 入	5.4	6.4
計	100.0	100.0

表Ⅱ-50

志 向 行 動	遊 び ・ 趣 味	勉 強
休 息 だ ん ち ん 社 会 活 動 つ き あ い ラ シ レ オ テ ビ	50.0	43.6
新聞・読書		4.3
旅 行	6.5	7.1
観 覧 ・ 鑑 賞	4.3	12.9
趣 味 ・ 鑑 賞	12.0	2.1
勉 強		1.4
ス ポ ー ツ	17.4	16.4
そ の 他	1.1	2.9
無 記 入	3.3	1.4
計	5.4	7.9
計	100.0	100.0

(右の表は平日の行動、左の表は休日の行動)

それぞれの志向を示した人が現実によくを過している余暇行動はどのようなものかを見たのが表Ⅱ-50・51である。まず平日の場合、遊び志向を示した人は趣味・ぶらつきとい

ったことで時間を多く使っているという人が勉強志向よりも多く、逆に、新聞・読書や勉強という面では勉強志向の人が高率になっている。また、休日の場合、遊び志向の人に多いのは旅行及び休養、勉強志向の人に多いのは新聞・読書社会活動であり、それほどの大きな差ではないが勉強も同一の傾向となっている。こう見てくると、実態と志向とは同一の方向線上にのっかることが傾向としてみとめられ、現実で足りないものを志向するのではなく、現実に行っているものをさらに増強する形で志向があらわれるといえそうである。

d 自己学習の機会充実の方向

今後の充実の方向として、次の四つの中からもっともだいたいなものとして考えるものをえらんでもらったわけである。

- ① 政府や役所がもっと力をいれて充実させることが必要
- ② 新聞社などの民間の施設がもっとふえることが必要
- ③ 気のあった者がグループでやれるような方法が充実することが必要
- ④ 一人でいろいろな方法・機会を利用してやれることが必要

全体としては、政府や役所が力をいれることをあげた人が約三分の一でもっとも多く、グループ学習をあげた人がもっとも低率となっている。しかし、男女のあいだでは異なった傾向のもののようにある。すなわち、男性の場合は、民間の施設と個人学習に、女性の場合は政府や役所をあげている比率が相対的に高くなっている。

また、年代との関連をみると、政府や役所をより多くあげているのは三〇才から四〇才代の前半ぐ

表Ⅱ-52

今後方向	全体	男	女	20~24才	25~29才	30~34才	35~39才	40~44才	45~49才	50才代	60才代
政府や役所	33.8	24.1	34.4	32.3	26.5	42.1	35.2	44.5	30.0	24.4	36.4
民間の施設	21.5	31.0	20.8	12.9	23.5	15.8	26.5	11.1	22.0	38.9	22.7
グループで	14.4	13.9	14.4	12.9	8.8	31.6	20.6	11.1	16.0	9.8	9.1
個人で	26.1	31.0	25.6	38.7	41.2	10.5	11.8	28.9	24.0	22.0	31.8
その他無記入	4.2		4.8	3.2			5.9	4.4	8.0	4.9	
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表Ⅱ—53

今後の方向 利用機会	政府や 役所が	民間の 施設が	グルー プで	個人 学習で
本・雑誌	14.6	11.5	19.5	21.6
ラジオ・テレビ	13.5	11.5	7.3	17.6
公的な学級の 会 社 教育・訓練	8.3	4.9	4.9	4.1
通信教育	6.2	4.9		1.4
個人教授	22.0	19.7	17.1	25.5
グループ活動	17.7	18.0	9.8	9.5
民間の施設	11.5	9.8	9.8	17.6
その他		4.9		2.7
無回答	6.2	14.8	31.6	
計	100.0	100.0	100.0	100.0

らしいの年令の人であり、民間の施設は五〇才代の人、グループ形態は三〇才代、個人形態は二〇才代となっている。現にいま、学習のために利用しているものとの関係を見ると、本・雑誌やラジオ・テレビの利用、さらには個人教授による学習は個人での学習が今後の充実の方向としてだいたいであると考えている人の中に多いこと、政府や役所がもっと力をいれること及び民間の施設の拡大が必要であると考えている人の中にはグループでの学習を行なっている

人の比率が相対的に高いことなどの特長がみとめられる。

(古野 有隣)

Ⅲ 北国文化センター調査

2 北国文化センターの概要

北国文化センターは、昭和四一年九月に発足したが、その企画に当たったのは北国新聞社と北陸放送である。この新聞は石川県地方で最も有力な地方紙であり、北国文化センターからの「お知らせ」は同紙夕刊に連日のように掲載され、関係記事は朝夕刊を問わず紙面にのっている。さらに北陸放送のテレビ・ラジオによっても、このセンターの情報が家庭に送りこまれている。

センターの運営は、会員組織によって行なわれており、所定の入会金を納めれば、年令その他の制限なくだれでもが会員となることができる。会員数は発足いらい約三万人に達しているが、調査時点では約八千人である。ちなみに、会員には後述の「教室」に参加（受講料が加わる）ことができるほかに、各種の主催事業への優待、教材その他の購入割り引きなどの便宜がはかられている。

「豊かな明日へのコミュニティひろば」をこのセンターのキャッチ・フレーズとしており、その中心となっている教室は、金沢市の中心部香林坊の一角にある千代田生命

ビルにある。この中央教室のほかに、金沢市内にもいくつかの教場があり、また県内二ヶ所（小松市と七尾市）にもそれぞれの教室をもっている。

このセンターで開催されている学科目は、調査時点で六十五科目であったが、その主なものを列挙するとつぎの通りである。

〔美術工芸コース〕

洋画・日本画・版画・レタリング・毛筆・ペン字・写真

・陶芸

〔音楽芸能コース〕

謡曲・民謡・演劇・ダンス・エレクトーン・ギター・ドラム・フルート・トランペット

〔いけ花・茶道・棋道コース〕

いけ花・茶道・囲碁

〔服飾・手芸コース〕

ファッション画・着つけ・和裁・洋裁・あみもの・手あみ・婦人帽子・手芸・刺しゅう・ろうけつ染・レザークラフト・紙人形・日本人形・七宝焼・アトフラワー・パンフラワー

〔料理コース〕

料理・オードブル・ホームパーティー

〔外国語コース〕

英会話（高校生・一般・初級・ガイドなど）・ロシア語・フランス語・スペイン語・中国語

〔チルドレンコース〕

母子英会話・小中学生英会話・バレエ・ジュニア美術

〔スポーツコース〕

ゴルフ

〔総合美容コース〕

チャーム・美容体操・メイクアップ

〔ホームサイエンス〕

ブライダルセミナー

上記のコース内容から読みとれるように、開設されている科目は、趣味ないし生活技術的なものが多く、語学以外の文化的教養に関するものが皆無である。金沢地方においては、公民館を中心とする行政サイドの社会教育施設において、科学的・文化的な教養をあつかった講座が盛んに行なわれていることと考え合わせることができよう。

2 参加者の実態

北国文化センターの調査票回収数は五一八であり、これにもとづいて、まず参加者の実態から明らかにしていくこととする。

(1) 参加者の概要

まず参加者の性別・年齢別構成（表Ⅱ―1）をみると

(無記入の六名を除く)、男子が一九%、女子八一%で、圧倒的に女子が多い。年令的には三〇才代をはさんで、二〇才代と四〇才代が多く、これは男女とも共通している。女子の場合二〇才代は未婚・無職の者によって、また四〇才代は主婦によって占められているが、これらの人びとの参加動機などについては後にふれることにする。

学歴については、高校卒が全体の五九% (二九三人) を占めてもっとも多く、次いで大学卒の二七% (一三九人) 義務教育修了の一四% (六八人) の順となっている。

表Ⅲ-1 参加者の性・年令

	男%	女%	計%
～19才	2.0	5.0	4.4
20～24才	7.0	25.8	22.8
25～29才	17.0	13.9	14.7
30～34才	16.0	9.8	11.0
35～39才	5.0	9.1	8.3
40～44才	16.0	15.3	15.4
45～49才	7.0	8.9	8.5
50才代	12.0	8.6	9.3
60才代	17.0	2.4	5.2
無答	1.0	0.2	0.4
計 (実数)	100. (100)	100. (418)	100. (518)

参加者の職業別構成では、もっとも多いのが主婦 (三五%) で、以下、事務職のサラリーマン (二四%)、専門職のサラリーマン (一五%) が比較的に多いが、他の職種は表Ⅲ-2 にみられる通り一〇% に満たない。なお、無職者は一一% を占めている。

表Ⅲ-2 参加者の職業

	%
事務職	23.9
労働職	2.7
管理職	3.9
専門職	15.4
自営業	6.6
販売職	1.5
主婦	34.6
無職	10.6
不明	0.8
計	100.

参加者の生活水準は、本人の自己判断にもとづくものであるが、表Ⅲ-3 にみられるような分布となっている。

表Ⅲ-3 参加者の生活水準

	%
上 { 上	0.4
中 { 中	4.2
下 { 下	2.9
中 { 中	24.2
中 { 中	47.9
下 { 下	12.2
上 { 上	3.3
中 { 中	2.7
下 { 下	0.8
無答	1.4
計	100

(2) 参加科目数

前述のように、北国文化センターでは、かなり多数の科目が開設されているが、参加者はどのようにこれを受講しているのだろうか。

まず一人あたりの受講科目数をみると(表Ⅲ-4) 一科目だけ受講している人が圧倒的で、二科目以上を受講している人は一割強にすぎない。平均受講科目は、一・一二であり、ほとんどが一科目のみの受講生であるとみてよいであろう。男女別に受講科目数を比べてみると、女子の方が多く、二科目以上を受講している者の比率は女子一四% 対

表Ⅲ—5 性別参加科目種類

	語学	生活	趣味	計
男	6.9	8.9	84.2	100
女	6.3	44.0	49.7	100
計	6.4	37.5	56.1	100

表Ⅲ—6 年代別の参加科目種類

	語学	生活	趣味	計
10代	8.3	45.8	45.8	100
20代	8.8	45.6	45.6	100
30代	9.4	45.8	44.8	100
40代	2.3	37.6	60.1	100
50代	3.9	13.7	82.4	100
60代	3.7	0.0	96.3	100

表Ⅲ—4 参加科目数

	1科目	2科目	3科目	無答	計
%	86.7	10.4	1.7	1.2	100

し男子四%にすぎず、平均科目数も女子が一・一六であるのに対し男子は一・〇四である。

(3) 科目の種類と参加率

前述のように、北国文化センターでは、数多くの学科目コースが開設されているが、その学科目を大別すると、語学（英語クラスなど）、生活技術（服飾、料理など）、趣味（美術、芸能など）に三分することができ。この三種のコースにどのように受講生が参加しているかを性別・年令別にみたのがⅢ—5、Ⅲ—6表である。

表Ⅲ—7

参加したのは初めてか(性別)

	男	女	計
初めて	59.0	55.6	56.3
中断継続 引き続き	17.0	17.6	17.5
無 答	22.0	24.2	23.7
無 答	2.0	2.7	2.5
計	100	100	100

性別にみると、語学への参加率に男女差はみられないが、生活技術コースには女性の参加が多く、趣味コースには男性が多い。また、年代別にみると、生活技術は三〇代までの若い層が比較的多く、四〇代以上になると趣味コースへの参加率が高くなっている。

(4) 参加は初めてか

北国文化センターがすでに数年間の歴史をもっていることはさきに述べたが、調査対象のうち継続して受講している人がどれくらいあるかをみると、(表Ⅲ—7)今期に初めて参加した人が五十六%、以前に受講していた人が四一%となっており、男女差は認められない。年代別にみると(表Ⅲ—8)、一〇代、二〇代の若い層は初めて受講した人がとくに多いのは当然であろうが、五〇代、六〇代と

いった老年層の初めての参加もかなり多いことがわかる。その中であって、四〇代では、以前から継続して受講する人が比較的多いのが目立っている。これは四〇代の参加率が高

表Ⅲ—8 参加したのは初めてか（年代別）

	初めて	中断 継続	引き 続き	無答	計
10代	78.3	13.0	8.7	0.0	100
20代	59.0	18.9	20.0	2.1	100
30代	51.0	14.0	24.0	1.0	100
40代	44.4	19.4	32.2	4.0	100
50代	56.2	18.8	22.9	2.1	100
60代	59.3	11.1	25.9	3.7	100

(5) センターへの経路

つぎに、センターでの学習に影響を及ぼすと思われる外的要因について検討してみる。北国文化センターは、金沢の中心にあり交通の便もよい場所であるが、ここに参加するまでに受講生はどのような経路をたどって、どれほどの時間をかけているのであろうか。まず、どこからどんな経路をたどって来るのかをしらべると（表Ⅲ—9）、自宅からセンターに直行する人が約半数を占めており、職場から帰宅前にセンターに立ちよる人が約四割となっている。男女別では、男子が職場からセンターに来る人が多く、女子

表Ⅲ—9 センターへの経路

	男	女	計
自宅→セ	41.0	53.9	51.5
職場→セ	51.0	35.5	38.4
自宅→用 →セ	2.0	6.0	5.2
職場→用 →セ	5.0	3.1	3.5
その他	1.0	1.4	1.4
計	100	100	100

かったこと（表Ⅲ—1）とあわせ考えると、こ

では自宅からセンターに来る人が多いのはいうまでもない。

(6) センターまでの所要時間

センターまでの所要時間は表Ⅲ—10にみられるように、一時間以内が全体の九六・五％となっており、三〇分以内が七九・三％と大多数を占めている。男女別で、男子の方が所要時間が短いのは、職場からセンターに来る人が多く（表Ⅲ—9）、職場が市の中心部に多くセンターに近いことと関係があるのであろう。

(7) 出席状況

出席状況は表Ⅲ—11にみられるように、皆出席あるいは「ほとんど出席」が断然多く、全体の九十七％を占めている。男女差もほとんど認められない。調査票を出席者に配布するという手続をとったため、実態以上に出席状況が

表Ⅲ—10

センターまでの所要時間

	男	女	計
15分以内	35.0	28.0	29.9
30分以内	51.0	49.6	49.4
1時間以内	11.0	18.8	17.2
2時間以内	3.0	2.4	2.5
2時間以上	0.0	1.0	0.8
無答	0.0	0.2	0.2
計	100	100	100

表Ⅲ-12 家族の理解

	賛成	どちらでもない	あまり賛成しない	計
10代	65.2	34.8	0.0	100
20代	46.5	51.9	1.6	100
30代	43.0	54.0	3.0	100
40代	42.0	57.2	0.8	100
50代	52.1	43.7	4.2	100
60代	59.3	37.0	3.7	100
計	46.7	51.4	1.9	100

あるが、年代別にみると（表Ⅲ-12）、一〇代や六〇代で高く、三〇代、四〇代で低いというU字型の傾向が認められる。しかし、これらの人びとも「賛成でも反対でもない」という消極的賛成をえて、

表Ⅲ-11 出席状況

	男	女	計
皆出席	36.0	37.2	37.3
ほとんど出席	57.0	60.7	59.6
半出席	7.0	1.9	2.9
欠席がち	0.0	0.2	0.2
計	100	100	100

良くなっていることは推定できるが、それにしてもかなり出席率は良いとみてよからう。

(8) 家族の理解

センターへの出席に対して、家庭が「積極的に賛成してくれている」と答えた人は、全体の四六・七％で

受講が可能になっているのであろう。

3 参加者の心理

ここでは、受講者の参加動機、期待、満足度など、参加者の意識面について吟味を加えることとする。

(1) 参加にかゝわる意識・動機

まず参加のきっかけとなったものを尋ねてみた（問三）。表Ⅲ-13にみられるように、「新聞にのった記事や案内を見て」が四割強ともっとも多く、「新聞での広告を見て」の三一・三％と合わせて、合計七四・二％が新聞にたっていることがわかる。この新聞は、いうまでもなく北国新聞であり、独占的地方紙の強みをここに見ることができ、ついで「人から教えられて」というクチコミが一五・八％に達している点も、地方的な特色かと推察される。

表Ⅲ-13

参加した
きっかけ

	%
新聞広告	31.3
新聞記事	42.9
他の案内	2.1
他からの案内	15.8
パンフレット	4.8
その他	2.7
無答	0.4
計	100

つぎに、受講者に「参加しようという気持ちを起こさせた理由」（問四）を尋ねてみた結果をみることにする。ここでの設問は九個の選択肢のうち二項目以内を選ぶようになった

ており、さらに二項目選んだ場合にはその理由の強弱によって順序づけをするようになってゐる。表Ⅲ—14はこれを男女別に示したものである。圧倒的に多い理由は「日頃やりたいと思つてゐた内容が学べるから」というものであり、ついで「講師がいいから」「場所が便利だから」「時間があいてゐるから」という三者が第二的な理由としてほぼ同程度あげられてゐる。男女別にみて、参加の理由には大差がみられないが、男子は「講師がいいから」という理由を、そして女子は「場所が便利だから」という理由をあげる者の率がそれぞれ反対の性よりも多い傾向がみられる。

受講してゐる科目の種類別に参加理由をみると(表Ⅲ—15)、趣味のコースでは「講師がいいから」を、生活技術コースでは「時間があいてゐるから」を、それぞれ他のコースよりも比較的多くあげてゐる。

参加理由と学歴との関係を見ると、学歴が高くなるほど「日頃やりたいと思つてゐた内容が学べるから」という理由が多くなり、逆に「講師がよいから」という理由が少なくなる。また、生活水準との関係でも、学歴と同様の所見がみられるが、ここでは表示しなかつた。

(2) 参加時の期待とその充足度

受講生が参加したときにもつた期待をたずねてみた結果は表Ⅲ—16の通りで、「生活を楽しむ」のに役立つ結果

表Ⅲ—14 参 加 し た 理 由 (%)

	内容	場所	環境	講師	目新 し	時間	新聞社	特典	誘い	計
男 { 第1 第2	81.0 8.0	0.0 13.0	3.0 1.0	11.0 19.0	0.0 2.0	4.0 13.0	0.0 1.0	1.0 5.0	0.0 1.0	100. 63.0
女 { 第1 第2	83.2 7.0	2.7 16.9	1.0 3.4	6.5 10.4	1.5 2.2	3.9 12.4	0.2 1.5	1.0 5.8	0.0 1.0	100. 60.6
計 { 第1 第2	82.7 7.1	2.1 16.2	1.4 2.9	7.3 12.0	1.4 2.1	3.9 12.7	0.2 1.4	1.0 5.6	0.0 1.0	100. 61.0

表Ⅲ—15 コース別の参加理由

	内容	場所	環境	講師	目新 し	時間	新聞社	特典	誘い	計
語学 { 第1 第2	88.5 2.9	0.0 20.0	0.0 5.7	2.9 2.9	0.0 8.6	5.7 11.4	0.0 0.0	2.9 0.0	0.0 2.9	100. 54.3
生活 { 第1 第2	85.0 6.8	2.9 15.4	1.0 1.4	2.4 6.3	1.9 2.9	5.8 16.4	0.0 1.0	1.0 8.7	0.0 0.0	100. 59.0
趣味 { 第1 第2	81.0 7.8	2.3 17.1	1.9 3.6	10.7 16.2	1.3 0.6	1.9 10.0	0.3 1.6	0.6 4.2	0.0 1.0	100.

う」とする者が圧倒的に多く、次いで「余暇を有効に過ごすことができるだろう」が多く、両者を合計すると七四・五％に達している。「職業に役立つ知識・技術を身につけられるだろう」「資格をとる準備になるだろう」といった実利に直結した期待をもった人は比較的少数である。

表Ⅲ—16
参加するときの期待(%)

をく的野	53.5
活し会	8.7
生業社視	4.2
友業	8.9
職人	8.1
人生観	4.1
家庭	21.0
余暇	4.1
資格	2.1
なし	
計	100

このような期待がかなえられたかどうかを質問したところ(問6)、表Ⅲ—17にみられるように、「充分かなえられている」「まあかなえられている」と肯定的な回答をした人が八四・八％、これに対し「あまりかなえられていない」「ほとんどかなえられていない」と否定的な回答をした人が七・三％であった。

表Ⅲ—17 期待の充足感

	男	女	計
充分	27.0	22.5	23.4
まあまあ	53.0	63.3	61.8
何となく	11.0	6.3	7.1
あまり	9.0	6.0	6.1
ほとんど	0.0	1.4	1.2
無答	0.0	0.5	0.4
計	100	100	100

た。

(3) 出席することの困難度

教育の機会が提供されても、職場や家庭の仕事以外に、学習時間をつくり出さないかぎり、それに出席することができない。ここでとりあげているような民間の社会教育機関に参加している人びとは、そのような時間のやりくりにどの程度困難を感じているのであろうか。われわれは質問調査の中で、「この教室に出席する時間をつくることは容易ですか」とたずねてみた(問9)、その結果は表Ⅲ—18の通りで、一三・七％の人が「相当無理をして時間を作っている」と答えている。同じ点を別の角度から確かめる意味で、「参加する前はこの時間を何に使っていましたか」(問10)を質問してみたところ、具体的に活動内容をあげた人が全体の四〇％に達しており、これらの人びとはその活動時間をセンターでの学習に切りかえたことになる。以上のような点から、センターへの参加者はいわゆる「有閑階級」の人びとであるという見方は適當ではないといえるであろう。

しかし、表Ⅲ—18に見られるように、職業的・家庭的にも責任の重い三〇代、四〇代の人々に「相当無理をして時間を作っている」と答える人が多く、この世代の人びとの学習時間が他の世代に比べて制限されることが多いことを

示している。

(4) 参加後の

変化

参加者たちは

センターが開設した学科目を受講した結果、生活の中でどのような変化を経験しているのだろうか(問12)。

この「変化」は

たんなる変化というよりは、いわば現実的な「学習の成果」といふべきものであろう。

変化が予想される生活面として、八個の選択肢を用意したが(表Ⅲ-19)、「変った」という回答をした人の比率がもっとも高いのは「家庭での楽しみがふえた」であり、ついで「時間の使い方が規則的になった」、以下「社会的視野が広がった」「仕事が楽しくなった」の順となっている。これに対し、「新聞の見かたが変った」「テレビの見方が変った」「人生についての考え方が変った」など、見方や考え方の変化は二〇%台にとどまっている。

表Ⅲ-18 出席することの困難度

	無 理 を を る を る	あ ま り 苦 し い	苦 勞 な し	計
10代	0.0	69.6	30.4	100
20代	11.1	64.2	24.7	100
30代	17.0	64.0	19.0	100
40代	20.2	59.6	20.2	100
50代	10.4	66.7	22.9	100
60代	11.2	44.4	44.4	100
全体	13.7	62.6	23.7	100

表Ⅲ-19

参加後の変化
(変ったものの比率)

	男	女	計
つきあいの 新見聞の 見かたの 仕事た 家庭事 人考生 時考生 社考考 視考考 野	29.0 18.0 20.0 29.0 66.0 22.0 31.0 30.0	30.2 23.6 20.5 37.7 74.8 20.5 52.7 40.8	30.3 22.8 20.7 36.3 73.2 20.8 48.6 39.0

男女別にみると、比較的低率である見方・考え方の変化には性差がみられないのに対し、かなり変化率の高かった項目で性差がみられ、女子の方が変化があったとする率が高い。

表Ⅲ-20

参加後の変化
(コース別)

	語学	生活技術	趣味
つきあいの 新見聞の 見かたの 仕事た 家庭事 人考生 時考生 社考考 視考考 野	25.7 20.0 31.4 40.0 65.7 25.7 37.1 45.7	31.4 28.0 21.7 40.6 80.2 19.3 57.0 41.5	30.4 21.4 20.4 34.3 69.9 20.7 45.3 37.2

表Ⅲ-21

参加後の変化
(学歴別)

	義務教育	高卒	大卒
つきあいの方	33.8	33.8	21.6
新聞レビ	23.5	24.9	15.8
見方	13.2	23.2	16.5
仕事	45.6	36.9	29.5
家庭の方	73.5	74.4	68.3
生え間の	23.5	21.8	16.5
人考時	51.5	49.8	43.9
社視	42.6	41.0	31.7

受講科目の種類別に変化率をみると(表Ⅲ-20)、語学コースでは、他に比べて「テレビの見方が変わった」「人生についての考え方が変わった」「社会的な視野が広がった」という変化を回答した人が多く、生活技術コースでは「新聞の見方が変わった」「家庭での楽しみがふえた」「時間の使い方が規則的になった」という変化が多い。趣味コースでは、全体的に他のコースよりも変化率が低い。他のコースとはちがった変化率の配分が認められる。

以上のように、参加後の生活上の変化は受講科目の種類によって異なったあらわれ方をしているが、この変化率に關係のある要因として、受講者の学歴を指摘することができ。表Ⅲ-21にみられるように、「義務教育卒業」は高校卒や大学卒に比べて、参加後の変化率がほとんどの項目

で高く、反対に「大学卒」はほとんどの項目で低い。教育年数が短かいほど、文化センターに参加したことによって変化を受ける人が多いと推定される。

(5) センターへの満足度

全体としての満足度

「全般的にいつて、この教室(センター)に満足していますか」(問13)と、全体としての満足度をきいた結果、「たいへん満足している」「まあまあ満足している」と肯定的な人が合計八十九%、「なんともいえない」「あまり満足していない」と疑問ないし否定的なものが一%となっている(表Ⅲ-22)。

この全体としての満足度をいくつかの点から分析してみ。まず、性別にみると、表Ⅲ-22にみられるように、大差はみられないが男子の方がやや満足度が高い傾向がみられる。

年令別にみると(表Ⅲ-23)、「たいへん満足」は年代の上昇とともに増加し「まあまあ満足」が

表Ⅲ-22 性別・満足度

	男	女	計
たいへん満足	23.0	17.2	18.3
まあまあ満足	68.0	70.9	70.5
何ともいえない	4.0	3.4	3.5
あまり満足しない	5.0	8.0	7.3
無回答	0.0	0.5	0.4
計	100	100	100

減少している。 そして、各年代ともこの二つの回答の合計が九〇％前後に達している。大勢としては、九〇％前後が満足しているが、高年齢層ほど満足度がより強い傾向がうかがえる。他方、二〇代においては「あまり満足していない」という不満回答の多いが目立っている。学歴別には、学歴が高くなるほど満足度が低くなること が明らかに読みとれる（表Ⅲ—24）。また、受講している 学科目別にみると（表Ⅲ—25）、生活技術や趣味に比べて 語学の受講者の満足度がやや低いようである。ただし、こ こで指摘しておきたいのは、「学歴が高くなると満足度が 低くなる」という所見と、「語学の受講生の満足度が、他の 科目に比べて低い」という所見とが、たがいに独立した						
表Ⅲ—23 年 令 別 満 足 度						
	10代	20代	30代	40代	50代	60代
たいへん満足	8.3	8.4	17.0	29.0	26.5	31.0
まあ満足	79.2	74.8	72.0	65.4	61.3	58.6
何ともいえない	8.3	4.2	2.0	2.4	6.1	0.0
あまり満足しない	0.0	12.6	9.0	3.2	0.0	3.5
無 答	4.2	0.0	0.0	0.0	6.1	6.9
計	100	100	100	100	100	100

事象ではないという点である。すなわち、表Ⅲ—26に示したように、語学の受講者の学歴は、他の科目に比べて大卒程度が多いのであるから一つの事象として理解すべきであらう。ただ、目下のところ満足度を左右しているのが、学歴であるのか、語学にあるのかは決めがたい。

細目別の満足度
満足度を、参加科目の内容・

表Ⅲ—25

科目別・満足度			
	語学	生活技術	趣味
たいへん満足	11.4	16.0	15.9
まあ満足	74.3	71.4	71.5
何ともいえない	2.9	5.8	5.8
あまり満足しない	11.4	6.8	6.8
無 答	0.0	0.0	0.0
計	100	100	100

表Ⅲ—24

学歴別満足度			
	義務教育	高校卒	大学卒
大い	26.5	18.8	12.9
満に足			
まあ満足	63.3	71.0	72.8
何ともいえない	4.4	3.4	3.6
あまり満足しない	5.9	6.1	10.8
無 答	0.0	0.7	0.0
計	100	100	100

講師・設備・雰囲気・経費別に質問した（問13—2）。その概況は表Ⅲ—28に示した通りで、全体として「講師」に対する満足度がとくに高いが、これに比べると「経費」の点で不満が多く「設備」の不満がこれについている。

同様の点を、こんどは受講科目の種類別にみてみる。

前述のように、語学コースには大学卒が多く、全体として満足度が低

表Ⅲ—27 細目別満足度の概況

	内容	講師	設備	雰囲気	経費
たいへん満足	29.7	47.4	28.8	24.5	11.4
まあまあ満足	54.8	40.7	48.0	58.5	48.8
何ともいえない	2.9	5.0	5.2	6.0	17.2
あまり満足しない	9.5	4.8	14.5	8.1	20.1
無 答	3.1	2.1	3.5	2.9	2.5
計	100	100	100	100	100

表Ⅲ—26

受講科目別学歴構成

	語学	生活技術	趣味
義務教育	5.7	14.5	12.3
高 卒	40.0	58.5	59.9
大 卒	54.3	22.2	24.6
不 明	0.0	4.8	3.2
計	100	100	100

表Ⅲ—28

参加科目別にみた満足度の細目

B) 講師

	語学	生活技術	趣味
たいへん満足	45.7	38.6	50.9
まあまあ満足	37.2	47.4	38.5
何ともいえない	8.6	5.8	4.5
あまり満足しない	8.6	5.8	4.2
無 答	0.0	2.4	1.9
計	100	100	100

A) 内容

	語学	生活技術	趣味
たいへん満足	20.0	23.7	33.3
まあまあ満足	51.4	60.4	52.5
何ともいえない	11.4	1.9	2.6
あまり満足しない	17.2	10.6	8.4
無 答	0.0	3.4	3.2
計	100	100	100

C) 設備

	語学	生活 技術	趣味
たいへん 満	42.8	29.5	27.2
まあまあ 満	40.0	47.8	48.9
何と いえ	8.6	6.3	4.2
あまり 満 足しない	8.6	12.1	16.8
無 答	0.0	4.3	2.9
計	100	100	100

D) 雰囲気

	語学	生活 技術	趣味
たいへん 満	40.0	19.8	24.6
まあまあ 満	42.9	67.2	56.3
何と いえ	5.7	4.8	7.4
あまり 満 足しない	11.4	4.8	9.1
無 答	0.0	3.4	2.6
計	100	100	100

E) 経費

	語学	生活 技術	趣味
たいへん 満	11.4	9.7	12.9
まあまあ 満	37.2	43.9	52.2
何と いえ	20.0	20.8	13.9
あまり 満 足しない	31.4	22.2	19.1
無 答	0.0	3.4	1.9
計	100	100	100

いのであるが、「設備」という点では他のコースよりも満足度が高いというように、それぞれのコースごとに特徴がみられる。

語学コースでは、上記のほかに「経費」の点で不満が目立っている。

趣味コースでは、一般にどの細目についても満足度が高い傾向があるが、「設備」面では不満が他に比して多い点

が特徴的である。生活技術コースの満足度は、語学と趣味の中間に位置している。

この満足度は、参加者の参加した意味によっても左右されるであろうから、両者の関係をしらべてみる(表Ⅲ—29)。

参加の意味として「余暇の活用」や「健康法の一つ」をあげている人は、その二〇%以上が「たいへん満足」しているが、「労働(仕事)の一部」をあげている人で「たいへん満足」している人は皆無である。しかし、「まあまあ満足」している人を合計

表Ⅲ—29 参加意味別の満足度

	余暇	知識欲	健康法	仕事
たいへん 満	21.3	18.7	20.7	0.0
まあまあ 満	70.1	69.2	75.8	91.0
何と いえ	2.7	3.8	0.0	4.5
あまり 満 足しない	5.9	8.3	3.5	4.5
計	100	100	100	100

すれば、一応満足している人は九〇%をこえている。

「知識欲の充足」を求めている人は、「たいへん満足」「まあまあ満足」を合計して九〇%に達せず、「あまり満足していない」が他に比して多いところから、やや満足度が低いことがわかる。

参加の意味

「あなたにとって、この教室に参加することは？」（問14）という問いに対し、四個の選択肢を準備したところ、大部分の人はそのうち一つを選んだが、一五%程度の人が二個以上を選んだ。その性別の結果が表Ⅲ-30に示してあるが、ここでは合計が一〇〇%をこえる。

全体として、最も多いのが「知識欲の充足」であり、ついで「余暇の活用」が五〇%をこえており、「健康法の一つ」「労働（仕事）の一部」とする人はごく一部である。

まさに民間社会教育機関であることを示しているといえよう。

女は男に比べて、「知識欲の充足」「余暇の活用」が多く、男は「健康法の一つ」「労働（仕事）の一部」とする

表Ⅲ-30 性別参加意味

	男	女	計
余 暇	46.0	51.9	50.8
知識欲	46.0	58.5	56.0
健康法	13.0	3.9	5.6
仕 事	6.0	3.9	4.3

者が女よりもやや多い。年代別には、二〇代以前の若い層では「余暇の活用」が少ないこと、三〇代では他の世代に比べて「労働（仕事）の一部」とする者が多いこと、高年齢になるほど「健康法の一つ」とする者が多くなること、など、いわば常識的に予想されるような結果がみられる。各年代を通じて多い「知識欲の充足」は、一〇代から三〇代にかけて次第に少なくなるが、三〇代をすぎて四〇代・五〇代と漸増し、六〇代に入ると再び少なくなるという波動を示している。これは各世代の内的・外的な諸条件によって規定されてくるものであらう。なお、表Ⅲ-32にみられるように「知識欲の充足」を求める率は、学歴が低い人

表Ⅲ-31 年代別参加意味

	10代	20代	30代	40代	50代	60代
余 暇	39.1	39.7	47.0	44.3	45.8	40.7
知識欲	60.9	57.1	49.0	54.0	64.6	51.9
健康法	0.0	1.5	8.0	4.8	10.4	25.9
仕 事	0.0	5.2	7.0	3.2	2.1	0.0

表Ⅲ-32 教育程度別参加意味

	義務教育	高卒	大卒
余 暇	32.4	45.7	41.7
知識欲	63.2	56.7	51.2
健康法	13.2	3.8	6.5
仕 事	1.5	3.8	7.2

ほど高いことも指摘することができ。 (多田 治夫)

(3) 学習活動に関連する諸側面

a 公的な学習機会への参加

北国文化センターの教室に参加をしたこれらの人々の中で、どのくらいの人がいわゆる社会教育関係の学級や行事に参加したことがあるのだろうか。表Ⅲ-33で見られるように参加したことがあるのが約四割、ない人が約六割の割合になっている。男性にくらべて女性の方がやや参加率は高いようであるが、その差はあまり大きくはない。そういう場への男性の参加が少ない実状から考えると、当センターに参加している男性の方はきわめて熱心な人であるように思われる。

年代との関係を見ると、三〇才代の後半から急激に参加率が高くなり、五〇才代、六〇才代になるとやや比率が低くなるが、それでも三〇才代前半より若い年代にくらべれば高い比率を示している。

学歴との関係としては、学歴段階が上になるにつれて参加率が低くなる傾向がみとめられる。しかし、初等教育段階の人と中等教育段階の人のあいだの差は小さく、ほとんど同程度の参加率といった方がよいかもしれない。この両者と高等教育段階の人のあいだにはあきらかな差がみとめられる。

表Ⅲ-33

性年代 参加経験	性年代		20才以下	20~24才	25~29才	30~34才	35~39才	40~44才	45~49才	50才代	60才代	全体
	男	女										
あ	36.0	41.6	21.7	24.4	30.7	36.8	60.5	53.7	56.8	45.8	48.1	40.5
り												
な	64.0	57.9	78.3	75.6	68.0	63.2	39.5	45.0	43.2	54.2	51.9	59.1
し												
無回答		0.5			1.3			1.3				0.4
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表Ⅲ-34

職業 参加経験	職業										学歴			
	事務職	労働職	管理職	専門職	自営業	販売職	主婦	無職	参加経験	初等教育段階	中等教育段階	高等教育段階	初等教育段階	中等教育段階
あ	38.7	28.6	45.0	23.8	44.1	62.5	50.3	36.4	あ	り	48.5	44.4	25.9	
り														
な	61.3	71.4	55.0	76.3	55.9	37.5	48.6	63.6	な	し	51.5	54.9	74.1	
し														
無回答							1.1		無	回答		0.7		
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	計		100.0	100.0	100.0	

また、職業別にしてみると、販売職、主婦の人の参加率が高く、（ただし、販売職の人の実数はきわめて少ない）逆に、専門職および労働職の人の参加率は低くなっている。（この場合も、後者の実数は少数であるが）

センターの教室に参加している領域との関係をみてみると、生活技術および趣味の科目に参加している人の中では四割以上が参加したことがあると答えているのに対し、語学への参加者では二十五％ぐらいとやや低くなっている。

b 社会教育観

一般的にいつて、これら公的な学習機会への参加は必ずしも高いものとはいえないが、その理由としては、このセンターへの参加者はどう考えているか、をきいてみたのが、表Ⅲ—37である。全体的には、「固苦しい感じを持つからだろう」という理由をあげた人が四割近くでいちばん多く、「PRが行き届かないのだろう」もだいたい1/4の人が指摘している。そのほかでは、「内容がびったりしないことが多いのだろう」「施設や設備がよくないのだから

表Ⅲ—35

参加領域 参加経験	参加領域		
	語学	生活技術	趣味
あり	25.7	42.0	42.1
なし	74.3	57.5	57.6
無回答		0.5	0.3
計	100.0	100.0	100.0

表Ⅲ—36

性・年代 最大理由	全体	男	女	20才以下	20～24才	25～29才	30～34才	35～39才	40～44才	45～49才	50才代	60才代
施設・設備	10.5	11.0	10.4	4.3	13.1	9.3	12.3	14.0	10.0	11.4	8.3	3.7
PR	25.5	22.0	26.3	30.4	15.7	28.0	36.7	23.3	30.0	31.8	16.7	29.6
固苦しい	39.5	32.0	41.2	65.3	51.2	45.3	24.6	32.5	34.9	31.8	35.4	26.0
内容	17.5	24.0	16.0		15.7	10.7	22.8	16.3	20.0	13.6	27.1	29.6
講師	3.3	7.0	2.4		0.9	2.7	1.8	11.6		4.5	8.3	7.4
その他	2.9	4.0	2.7		1.7	4.0	1.8	2.3	3.8	4.5	4.2	3.7
無回答	0.8	—	1.0		1.7				1.3	2.4		
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

う」といった理由も1と2割近くの人があげている。

男性と女性をくらべると、男性の場合は内容と講師という二つの点を最大の理由とする比率が女性よりも高く、女性の場合は、固苦しさとPRをあげた比率が相対的に高くなっている。男性の場合は直接的な要素、女性は周知的な要素を重く見ているといえそうである。

年令との関係では、二〇才代までの若い人の中に固苦しさをあげた率がかなり高いことがもともと目立つ傾向となっている。また、三〇才代・四〇才代ではPRの点、五〇才代・六〇才代では内容をあげている人がかなり多くなっている。

学歴との関係は表Ⅲ—37であるが、PRと内容の二つの点はともに、学歴段階の低い人ほどより強く感じており、

表Ⅲ—37

学歴 最大理由	初等教育段階	中等教育段階	高等教育段階
施設・設備	5.9	9.9	15.1
PR	29.4	27.6	20.1
固苦しい	38.2	37.3	43.3
内容	20.6	19.1	12.2
講師	4.4	2.7	4.3
その他	1.5	2.4	5.0
回答無		1.0	
計	100.0	100.0	100.0

施設・設備の点に関しては、それとは逆の傾向となっている。固苦しさに関しては、一定の傾向性はなく、高等教育段階の人の中にそれを指摘する声が、他の二つの学歴段階の人にくらべて、やや強いようである。

これまでは北国文化センターに参加をしたすべての人を対象に分析をしたものであるが、そのような公的な学習機会に実際に参加したことがある人となない人に分けてみたのが表Ⅲ—38である。参加したことのない人は固苦しい感じと内容という点をやや多く指摘し、参加したことのある人はPRが足りないのではないかという気持がやや強いようである。

表Ⅲ—38

参加経験 最大理由	あり	なし
施設・設備	10.5	10.5
PR	28.6	23.2
固苦しい	38.0	40.2
内容	15.7	19.3
講師	3.8	2.9
その他	2.9	2.9
回答無	0.5	1.0
計	100.0	100.0

参加経験のある人を、参加してみても期待がかなえられなかったという人と、かなえられなかったという人とに分けてみると、両者とも固苦しさをあげる人がもともと多いことは共通である。しかし、前者ではPRが第二位であるのに、後

者では内容があげられている。両者の差をさがしてみると、PRと固苦しさの点では参加したことのある人、施設・設備および内容の二点では参加したことのない人の方がより高率となっている。

表Ⅲ-39

期待が最大理由	かなえられなかった	ええなかつた
施設・設備	6.9	19.6
PR	34.5	15.7
固苦しい	40.0	33.4
内容	11.7	23.5
講師	4.1	3.9
その他	2.1	3.9
回答無	0.7	
計	100.0	100.0

C 自己学習の機会充実の方向

今後ますますその必要が増大してくる学習活動の機会が充実していくためにはどういう方向がだいじだと思えるかを、次の四つの方向に提示して選択してもらった結果が表Ⅲ-40である。

① 政府や役所がもっと力をいれて充実させることが必要

② 新聞社などの民間の施設がもっとふえることが必要
③ 気のあった者がグループでやれるような方法が充実することが必要

④ 一人でいろいろな方法・機会を利用してやれること

が必要

つまり、上から順に、行政型、民間型、グループ型、個人型とでも名付けうるが全体としては、グループ型がやや少ないくらいで、他の三者はほぼ同率になっている。

男女のあいだで差のみられるのは、民間型が男性、個人型が女性の二点で、行政型、グループ型はほとんど差がないといえる。

年令との関係としては、行政型は若い層と高年令者層に多く、その中間がやや低い比率という現象

表Ⅲ-40

性・年代 今後の方向	全体	男	女	20才以下	20才代	30才代	40才代	50才代	60才代
政府・民間施設グループで	25.7	26.0	25.6	26.1	28.4	25.0	23.4	18.7	29.6
府・民間施設グループで	26.4	32.0	25.1	17.4	20.0	26.0	31.5	39.6	33.4
個人の記入	20.6	22.0	20.3	39.2	18.9	19.0	23.0	16.7	22.2
その他	25.3	20.0	26.6	13.0	31.5	27.0	19.4	25.0	14.8
無回答	2.0		2.4	4.3	1.2	3.0	2.7		
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

がみられる。民間型は年令層の上になるにつれて次第に傾斜を強めて行くような傾向のようである。グループ型の場合は、二〇才以下の場合に強いが、その他の年令層の場合はあまり差はなさそうである。さいごの個人型は、行政型と反対ともいえる傾向であり、二〇才以下の層と高年令層の比率が低く、二〇才代・三〇才代を中心に中間の年令段階の人がやや強く志向しているようである。

IV 比較とまとめ

これまで、朝日カルチャーセンターおよび北国文化センターの各種教室への参加者を対象として行なった調査をさまざまな角度から分析してきたわけであるが、次にその両者の比較を中心に、公的な社会教育における学習機会への参加者のデータを若干つけ加えることによって、今回の調査の主題である民間教育事業ならびにそれへの参加者の特色を考察することとする。

1 参加者ならびに参加の実態

まずはじめに両センターへの参加者をその属性の点からながめてみると、いずれの場合にも共通に圧倒的に女性の参加者が多いことが一つの特長である。多くの男性の場合は時間的に出席可能なのが夜間に限られること、開講されている科目が女性向けのものが多くを占めていることなど

がその原因として考えられよう。

年令の点においても、二〇才代と四〇才代の人が他の年令にくらべて多いことも両センターに共通している。しかし、朝日カルチャーセンターの場合は四〇才代、北国文化

表Ⅳ-1

	朝日	北国
男	10.2	19.1
女	88.0	79.8
不明	1.8	1.1
計	100.0	100.0

センターの場合は二〇才代の方が多いというちがいがいる。これは、あとで見るように、「朝日」の場合、四〇才代の人の中に語学や一般教養への参加者が多く、これらの科目、とくに一般教養の科目は「北国」では開講されていないことが影響しているのであるろう。

このことは学歴という面とも関係している。「北国」の場合は高校卒が全体の約六割でもっとも多くなっているのに対し、「朝日」の場合は大学卒の人が高校卒の人を上廻

表Ⅳ-2

	朝日	北国
20才以下	0.4	4.4
20～24才	12.3	22.8
25～29才	12.0	14.7
30～34才	6.7	11.0
35～39才	12.0	8.3
40～44才	15.8	15.4
45～49才	17.6	8.5
50才代	14.4	9.3
60才代	7.7	5.2
無記入	1.1	0.4
計	100.0	100.0

っており、語学および一般教養の参加者の中には大学卒の人が多いという状況だからである。

つぎに、職業の点であるが、女性の参加者が圧倒的に多いこともあって、主婦がもっとも多いのが両者に共通の傾向となっているが、しかしその比率は「朝日」の方がかなり高率である。そのぶんだけ「北国」の場合は事務職、専門職などの比率が高くなっている。

表Ⅳ-4

	朝日	北国
事務職	9.9	23.9
労働職	1.1	2.7
管理職	4.9	3.9
専門職	10.9	15.4
自営業	4.2	6.6
販売職	2.1	1.5
主婦	54.9	34.6
無職	10.6	10.6
不明	1.4	0.8
計	100.0	100.0

参加している科目数としては、「朝日」「北国」両センタートとも一科目に参加している人が圧倒的に多い。時間的にも、経費的にも当然のことであろう。

表Ⅳ-3

	朝日	北国
義務教育程度	3.5	13.1
新制高校程度	44.0	56.6
大学程度	48.3	26.8
不明	4.2	3.5
計	100.0	100.0

表Ⅳ-5

		語学	生活 術技	趣味	一般 教養
朝日	男	10	12	1	7
	女	10	94	93	85
	不明	0	1	3	1
	計	20	107	97	93
<hr/>					
北 国	男	7	9	85	
	女	28	196	222	
	不明	0	2	2	
	計	35	207	309	

(数字は実数を示す)

あるが、一般教養的な科目は「朝日」の場合のみであって「北国」の場合には用意されていない。「朝日」の場合は、男性は語学と一般教養にほぼ同数ぐらい参加し、生活技術と趣味の科目への参加はきわめて少数であるのに対して「北国」の場合は大部分の人が趣味の科目に参加しているという対照的な傾向を示している。

年令の点では、生活技術が二十代から三十代の比較的若い層に多いこと

表Ⅳ-6

	朝日	北国
1 科目	79.6	86.7
2 科目	14.4	10.4
3 科目	4.9	1.7
無記入	1.1	1.2
計	100.0	100.0

が共通的に見られるが、四十代以上の人の場合を見ると、「朝日」では一般教養にウエイトがかかっているのになんたいして、「北国」の場合は、趣味に傾斜しているといううかがいを示している。

表N-7

		語学	生活技術	趣味	一般教養	計
朝日	20才代	8.1	14.9	50.0	27.0	100.0
	30才代	6.8	28.8	30.5	33.9	100.0
	40才代	8.3	39.4	21.1	31.2	100.0
	50才代	22.2	46.7	24.4	26.7	100.0
	60才代	0	54.6	22.7	22.7	100.0
北国	20才以下	8.4	45.8	45.8		100.0
	20才代	8.8	45.6	45.6		100.0
	30才代	9.4	45.8	44.8		100.0
	40才代	2.3	37.6	60.1		100.0
	50才代	3.9	13.7	82.4		100.0
	60才代	3.7	0	96.3		100.0

センターの教室に出席するための物理的条件としていくつかの点をながめてみると、まず経路としては自宅からセンター直行型は「朝日」の方が多く、逆に「職場→センター」というのは「北国」の方が多くなっている。これは「北国」の方に男性参加者の比率が高いためであろう。そ

の所要時間としては、「朝日」では三十一分～六十分が、もっとも多いのにたいし、「北国」では十六分～三十分であり、行動圏の広狭をよくあらわしている。このことは比率が急減する分れ目が「朝日」では二時間以上であるのに「北国」では一時間以上であることからもうかがえよう。

さいごに、出席状況の実態に触れよう。「朝日」「北国」いずれの場合も大部分の人が

表N-9

	若妻学級	消費生活学級	婦人学級	家庭教育学級	ふとるセー	計
ほとんど休まなかった	69.2	51.4	61.8	67.3	66.7	63.6
たまに休んだ	25.6	37.8	28.4	25.3	22.2	27.8
かなり休んだ	2.6	8.1	4.9	2.1		3.8
無回答	2.6	2.7	4.9	5.3	11.1	4.8
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表N-8

	朝日	北国
15分以内	6.0	29.9
30分以内	18.7	49.4
1時間以内	54.1	17.2
2時間以内	20.1	2.5
2時間以上	1.1	0.8
無回答	0	0.2
計	100.0	100.0

皆出席もしくはほとんど出席と答えており、きわめて高い出席率を示している。公的な社会教育の学習機会への参加者の出席状況は表Ⅳ-9のとおりである

が、この場合の回答者がそれぞれの学級の代表的な人であることを考えると「朝日」「北国」両センター受講者の出席状況はきわめて高いものといつてよさそうである。

表Ⅳ-10

	朝日	北国
皆出席	25.4	37.3
ほんの少数	71.4	59.6
ほとんど欠席	2.1	2.9
欠席が大半	0.7	0.2
無回答	0.4	—
計	100.0	100.0

2 参加者の意識面

(1) 参加の動機

参加しようという気持を起させた契機としては、「新聞にのった記事や案内を見て」がもっとも多く、「新聞広告を見て」が第二位であること、そして、この両者以外にはあまり高い比率を占めたものがないことが「朝日」「北国」両者に共通している。この両者がいずれも新聞社の事業であることから、当然の姿であるといえよう。「人から教えられて」がその他では高い比率であるが、「北国」の方がやや高率となっている。これまでの経過年数の長さもたらしたものと考えられる。

参加した理由としては、「日頃やりたいと思っていた内容が学べるから」ということを大部分の人があげていることが共通している。その他の理由としては、「講師がいいから」「場所が便利だから」「時間があいているから」をあげる人が若干いることも共通の傾向となっている。

表Ⅳ-11

	朝日	北国
内容	77.8	82.7
場所	3.5	2.1
環境	0.4	1.4
講師	12.0	7.3
新しさ	1.4	1.4
時間	4.2	3.9
新聞社	0.7	0.2
特典	—	1.0
誘い	—	—
計	100.0	100.0

内容とのかかわりで参加した人が多いことは男性・女性にも、どの年代にも共通しているが、参加した科目との関係において、趣味の領域に参加した人の中には、他の領域にくらべて、ややその比率が低いことが、「朝日」「北国」に共通した傾向となっており、そのぶんが講師の比率が高くなっている。講師が決め手となっているのは「朝日」の語学の場合にも見られるが、同じ語学でも「北国」の場合にはそうっていない。

このように、「朝日」と「北国」の場合では必ずしも同じ傾向とはいえないが、公的な社会教育の場における学習機会への参加者の場合とはあきらかに異った傾向を持っているといえそうである。すなわち、集Ⅳ-14にあるように、公的社会教育への参加者の期待は「社会的な視野」にもっとも強く向けられ、「朝日」「北国」に共通して多数であ

表Ⅳ-12

	語 学		生活技術		趣 味		一般教養
	朝日	北国	朝日	北国	朝日	北国	
内 容	75.0	88.5	75.3	85.0	72.0	81.0	84.2
場 所			7.2	2.9	4.3	2.3	0.9
環 境				1.0	1.1	1.9	
講 師	15.0	2.9	7.2	2.4	21.5	10.7	8.4
日新しさ			1.0	1.9		1.3	2.8
時 間	10.0	5.7	7.2	5.8		1.9	3.7
新聞社			2.1		1.1	0.3	
特 典		2.9		1.0		0.6	
誘 い							
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表Ⅳ-14

	若妻学級	消費生活級	婦人学級	家庭教育級	婦人ふりさとセミナー	全 体
生活を楽しくするの役に立つ	17.9	10.8	11.8	5.3		9.6
社会的な視野	43.6	48.6	61.6	42.0	72.2	52.0
新しい友人			1.0	2.1	11.1	1.7
職業・技術の知識	2.6		1.0			0.7
人生観	10.3	2.7	5.9	7.4		6.2
家庭をよりよく	15.4	27.1	12.8	40.0		23.0
余暇を有効に	5.1	10.8	3.9	1.1	16.7	4.8
資格の準備						
その他			1.0	2.1		1.0
無 回 答	5.1		1.0			1.0
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表Ⅳ-13

	朝 日	北 国
生活を楽しくするの役に立つ	45.1	53.5
社会的な視野	12.0	8.7
友人	2.5	4.2
職業	14.8	8.9
人生観	17.3	8.1
家庭	2.8	4.1
余 暇	9.9	21.0
資 格	2.5	2.1
その他	4.6	4.1

(複数回答)

った「生活を楽しむ」への期待は一割以下でしかない。また、「家庭をよりよく」への期待においても同様のことがいえる。

(2) 参加時の期待とその充足度

参加する時にもった期待としては「生活を楽しむのに役立つだろう」ということをおおよそ半数ぐらいの人があげている。これは「朝日」「北国」双方に共通しているが、そのほかの期待としては、「北国」の場合は「余暇を有効に過ごすことができるだろう」という期待を二割ほどの人があげ、この二つ以外の理由はどれも一割以下となっている。これにたいして「朝日」の場合は「人生観を確かにすることができるよう」「職業に役立つ知識・技術を身につけられるだろう」そして、「社会的な視野を広げることになるだろう」という理由を一割以上の人があげている。開講されている科目の差が影響しているものと思われる。

参加する時に持っていた期待の充足感是非常に高いのが「朝日」「北国」に共通した傾向となっている。充分なえられているという人が「朝日」では三十二%、「北国」では二十三%である。これは公的社会教育参加者の場合の十三%に比べてかなり高い率であるといえよう。

表Ⅳ—16

	朝 日	北 国
充 分	32.4	23.4
まあまあ	55.3	61.8
あ ま り	5.3	6.1
ほとんど	0.7	1.2
何ともいえない	4.9	7.1
無 回 答	1.4	0.4
計	100.0	100.0

表Ⅳ—15

	若 妻 学 級	学 費 生 活 級	婦 人 学 級	家 庭 教 育 級	婦 人 セ ミ ナ ー と	全 体
充分なえられた	15.4	27.1	10.8	8.4	16.7	13.1
まあ、かなえられた	58.9	51.3	64.7	63.1	66.6	61.8
あまりかなえられなかった	10.3	5.4	3.9	5.3		5.2
ほとんどかなえられなかった		2.7	2.0	1.1	5.6	1.7
何ともいえない	15.4	10.8	13.7	15.8		13.4
無 回 答		2.7	4.9	6.3	11.1	4.8
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

(4) 参加後の変化

センタ一の教室に参加したことによってそれぞれの人がどのような変化が起ったかと感じているかを聞いてみたわけであるが、「家庭での楽しみが増えた」ことをあげた人がもっとも多く、以下、「時間の使い方が規則的になった」「社会的な視野が広がった」の順であることが両センタ一に共通の傾向である。比率からいうと、「家庭での楽しみ」「仕事での楽しみ」「人とのつきあい」の点での変化を感じている人が「北国」の場合に多く、「人生についての考え方」「社会的な視野」は「朝日」の場合の方がより高率となっている。一般教養的な科目を開講している特色がよく現われている、といえよう。

公的社会教育の場への参加者とくらべるとこの場合でも、かなりの差がみとめられる。すなわち、「朝日」「北国」に共通して多かった「家庭での楽しみが増えた」をあげた人は一割ちよつと、順位は第五位であり、もっとも多くの人があげたのは「社会的変化」で、その比率は五十三・六%になっている。それ以下は「人とのつきあい方」「人生の考え方」「親としての自信」と続き、その次に「家庭での楽しみ」があがってきている。民間教育事業Ⅱ家庭での楽しみ、公的社会教育事業Ⅱ社会的視野という図式が描けるようである。

表N-18

	朝日	北国
つきあい	25.0	30.3
新聞	21.5	22.8
テレビ	81.3	20.7
仕事	30.0	36.3
家庭	58.1	73.2
人生	28.5	20.8
考	47.3	48.6
時間	45.4	39.0
社会的視野		

「親としての自信が
強くなった」は朝日
・北国両センタ一の
場合、回答項目に含
まれていない

表N-17

	若妻学級	消費生活級	婦人学級	家庭学級	婦人学級	セミナー	全
人とのつきあい方	35.9	29.7	32.4	14.7	33.3		26.8
新聞の見方	15.4	21.7	11.8	9.5	16.7		13.1
テレビの見方	2.6	8.1	3.9	5.3	11.1		5.2
仕事を楽しむ	12.8	8.1	6.9	6.3			7.2
家庭の楽しみ	25.6	8.1	13.7	12.6	11.1		14.1
人生の考え方	23.1	24.3	18.6	16.8	22.2		19.6
時間の使い方	12.8	10.8	11.8	7.4	11.1		10.3
社会的視野	48.7	73.0	58.8	43.2	50.0		53.6
親としての自信	10.3	8.1	9.8	26.3			14.4

(3) 全体的な満足感

センターの各教室に参加したことにたいして全体的な印象としてどの程度の満足感を感じているかを聞いたわけである

が、朝日・北国
いずれの場合も
約二割の人が強い満足感を感じ
約七割の人もまあ満足をしているという結果であり、総じて、両センターとも受講者から及第点を与えられている、といつてさしつかえないだろう。

この全体的な満足感をいくつかの角度から眺めてみる。
まず性別であるが、朝日の場合は女性の方が強い満足感を多く示しているのに反し、北国の場合は男性がより多く、強い満足感を示しているという異なった傾向を示している。
年令との関係を見ると、性別の場合とちがって、年代の上になるにつれてほぼ満足感が高くなるという共通の傾向がみとめられる。

学歴との関係においても両者に共通の傾向がみとめられ

表Ⅳ—19

	朝 日	北 国
たいへん満足	20.4	18.3
まあ満足	68.0	70.5
何ともいえぬ	6.0	3.5
あまり満足して いない	5.6	7.3
無 回 答	0	0.4
計	100.0	100.0

表Ⅳ—20

	朝 日					北 国				
	20才代	30才代	40才代	50才代	60才代	20才代	30才代	40才代	50才代	60才代
たいへん満足	13.3	18.9	22.1	29.3	31.8	8.4	17.0	29.0	26.5	31.0
まあ満足	66.7	69.8	68.4	61.0	41.0	74.3	72.0	65.4	61.3	58.6
何ともいえぬ	11.1	1.9	5.3	7.3	13.6	4.2	2.0	2.4	6.1	—
あまり満足して いない	8.9	9.4	4.2	2.4	9.1	12.6	9.0	3.2	—	3.5
無 回 答					4.5	5.2	—	—	6.1	6.9
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表Ⅳ—21

	朝 日			北 国		
	義務教育	高校卒	大学卒	義務教育	高校卒	大学卒
たいへん満足	30.0	24.0	16.1	26.5	18.8	12.9
まあ満足	60.0	62.4	73.8	63.2	71.0	72.7
何ともいえない	—	8.8	3.6	4.4	3.4	3.6
あまり満足していない	10.0	4.8	5.8	5.9	6.1	10.8
無回答			0.7		0.7	
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

る。表Ⅳ—21に見られるように、学歴段階の上の人ほど強い満足感を感じている比率が低いという結果になっている。しかし、まあまあ満足しているという人の比率は学歴の上の人ほど多いことを合わせて考えればあまり差はないものといえるかもしれない。高学歴層ほどいろいろと注文をつけたくなる点に気づくことが多いということのようにも思われる。

表Ⅳ—22

	朝 日				北 国		
	語学	一般教養	生活技術	趣味	語学	生活技術	趣味
たいへん満足	15.0	17.8	21.6	20.4	11.4	16.0	18.8
まあ満足	70.0	71.0	66.0	71.0	57.2	71.4	70.9
何ともいえない	5.0	6.5	7.2	2.2	2.9	5.8	1.9
あまり満足していない	10.0	4.7	5.2	5.4	11.4	6.8	7.8
無回答				1.0			0.6
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

参加領域の点から見ると、朝日・北国とも生活技術および趣味という実用的な科目に参加した人の場合が、教養的な内容の科目への参加者よりも強い満足感を多く感じている。成果が日に見えて感じられるようなものがより強い満足感を生じさせるものなのかもしれない。また、両センタ

表Ⅳ—23

	朝 日					北 国				
	内 容	講 師	設 備	雰 囲 気	経 費	内 容	講 師	設 備	雰 囲 気	経 費
たいへん満足	43.0	60.3	31.7	33.1	7.0	29.7	47.4	28.8	24.5	11.4
まあ満足	47.8	31.3	47.5	51.8	37.0	54.8	40.7	48.0	58.5	48.8
何ともいえない	4.9	4.2	14.4	7.7	40.5	2.9	5.0	5.2	6.0	17.2
あまり満足していない	2.5	2.1	3.2	4.2	13.4	9.5	4.8	14.5	8.1	20.1
無 回 答	1.8	2.1	3.2	3.2	2.1	3.1	2.1	3.5	2.9	2.5
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

1の場合とも、語学への参加者が不満足感を多く表明しているのが目につく。これは語学への参加者の中に高学歴層が多いことがその理由であろう。

これまでは全体的な印象に類するものを見たわけであるが、これをもう少し細分化して内容、講師、設備、雰囲気、経費という点に分けて、それぞれへの満足感を聞いてみたのが表Ⅳ—23である。朝日・北国とも、強い満足感をもっとも多くの人を感じているのは講師にたいしてであり、とくに朝日の場合は六割の高率を示している。また、内容の点が講師に次いで二番目に高率であることも共通である。全体としての高い満足感を生んでいる要素は講師と内容である、ということができよう。経費に関してはたいへん満足であるという人はごく少ない。

3 公的な学習機会への参加

この調査の対象は、朝日新聞社および北国新聞社が開設している、いわば民間の教育事業への参加者であるが、その人々が公的な機関（教育委員会、公民館など）が開設している学習機会にはどのように参加をしているのかを見てみたわけである。全体的な参加率としては朝日の場合が約三分の一、北国の場合は四割であり、やや北国の場合の方が高いが、ほとんど差がないといつてよいくらいである。また、男性よりも女性の方が参加率が高いことが朝日・

北国ともに共通している。

年令とのかか

わりを見たのが

表Ⅳ—25である

が、そこでわか

るように、二十

代から四十代ま

では年令段階が

上になるにつれ

て参加率も上昇

する傾向が両者

に共通にみとめ

られる。つまり、

四十代の人が公

的な学習機会へも

っとも熱心に参

加しているという

ことになる。そ

して、五十代、

六十代ではやや

そのカーブは下

降する（朝日の

五十代は極端に

表Ⅳ—24

参加経験		あ り	な し	計
朝 日	全 体	34.5	65.5	100.0
	男	20.7	79.3	100.0
	女	35.2	64.8	100.0
北 国	全 体	40.5	59.5	100.0
	男	36.0	64.0	100.0
	女	41.6	58.4	100.0

これらの人々が参加した公的な学習機会はどのような種類の学習をする機会であったのかを調べてみると、朝日・北国とも約半数の人が一般教養関係のものに出席し、もっとも多くなっている。次いでは、趣味に関するものである

表Ⅳ—25

参加経験		あ り	な し	計
年 代				
朝 日	20才以下	—	—	—
	20才代	10.8	89.2	100.0
	30才代	43.4	56.6	100.0
	40才代	49.5	50.5	100.0
	50才代	19.5	80.5	100.0
	60才代	40.9	59.1	100.0
北 国	20才以下	21.7	78.3	100.0
	20才代	26.9	73.1	100.0
	30才代	47.0	53.0	100.0
	40才代	54.8	45.2	100.0
	50才代	45.8	54.2	100.0
	60才代	48.1	51.9	100.0

ことも共通しており、その比率もだいたい三分の一を少し上回るぐらいで一致している。また、家庭教育に関するものは女性に限られていることも共通している。

センターの参加領域との関係としては、語学関係の教室に参加している人が、公的な学習機会への参加率が、他領域への参加者にくらべて、低いという共通の現象がみられる。このような要求への公的な学習機会の供給体制が現実では少ないことがその因となっているように思われる。朝日・北国の両者を通じて、朝日カルチャーセンターでの一

表N-26

参加種類	北 国			朝 日		
	男	女	全体	男	女	全体
一般教養	61.2	47.7	50.0	66.7	52.3	53.2
趣 味	47.2	36.1	38.5	16.7	36.4	35.1
家庭教育	22.7		18.9		21.6	20.2
職 業	3.5	5.6	3.9	33.3	6.8	8.5
実用技術	14.5	11.1	14.0		11.4	10.6
知識 他	1.8	2.8	1.9		2.3	2.1

(複数回答のため、計は100%を超える)

般教養の領域への参加者が公的学習機会への参加率が高くなっている。

b 社会教育観

公的な学習機会への人々の参加は一般的にいつて必ずしも多くはないという理由を、民間教育事業への参加者たちはどう見ているのだろうか。表Ⅳ-28に見られるように、PRの不足、固苦しさ、内容の不適合さの三点がベストス

表N-27

参加経験 参加領域	朝 日		北 国	
	あ り	な し	あ り	な し
語 学	25.0	75.0	25.7	74.3
生 活 技 術	27.8	72.2	42.0	58.0
趣 味	36.6	63.4	42.1	57.9
一 般 教 養	43.0	57.0	—	—

は比較的高年層の方に多いことが朝日・北国の場合に共通にみられるが、そのほかには共通的に現われている傾向はないものの如くである。

4 民間教育事業の果している役割とその意義

——調査のまとめとして——

「朝日カルチャーセンター」及び「北国文化センター」といういずれも新聞社の文化事業として行なわれている教

リーになっていることが朝日・北国に共通している。しかしその順位は同一ではなく、朝日の場合はPRを指摘する声がいちばん多いのにたいし、北国の場合は固苦しさが一位となっている。

男性・女性による差としては、内容面を指摘する声が男性の場合に強いことが共通の傾向となっているが、そのほかの点では必ずしも一定の傾向性はみいだされない。

年代別にしてみると、施設・設備と内容の面を指摘する声

二・三の点に触れてみることにしたい。
 その一つは民間教育事業が市民の多様な学習要求に多彩なプログラムの内容としてはいわゆる趣味的・実用的な

表N—28

	朝 日			北 国		
	全 体	男	女	全 体	男	女
施 設・設 備	7.9	3.4	8.4	10.5	11.0	10.4
P R	31.5	31.1	31.6	25.5	22.0	26.3
固 苦 し い	20.1	24.1	19.6	39.5	32.0	41.2
内 容	28.0	34.6	27.2	17.5	24.0	16.0
講 師	6.1	3.4	6.4	3.3	7.0	2.4
そ の 他	2.8	3.4	2.8	2.9	4.0	2.7
無 回 答	3.6	—	4.0	0.8	—	1.0
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表N—29

	朝 日					北 国				
	20才代	30才代	40才代	50才代	60才代	20才代	30才代	40才代	50才代	60才代
施 設・設 備	9.1	9.4	7.4	7.3	4.5	11.6	13.0	10.5	8.3	3.7
P R	36.4	35.8	23.2	43.9	18.2	20.5	31.0	30.6	16.7	29.6
固 苦 し い	19.7	20.8	22.1	9.8	27.3	48.9	28.0	34.0	35.4	26.0
内 容	19.7	30.2	29.4	31.7	36.5	13.7	20.0	17.7	27.1	29.6
講 師	7.6	1.9	10.5		4.5	1.6	6.0	1.6	8.3	7.4
そ の 他	3.0	1.9	3.2	2.4	4.5	2.6	2.0	4.0	4.2	3.7
無 回 答	4.5		4.2	4.9	4.5	1.1		1.6		
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

ぐいのものがとりいれられているが、とくに朝日カルチャースセンターの場合にあっては教養的な内容の科目も数多く開講され、中にはかなり専門的な、高度の内容が提供されている。市民の学習要求に応えるための公的な措置としてある、いわゆる社会教育事業ではカバーしえていない層が相当程度この民間教育事業に吸収されていることが、両センターの受講者の公的学習機会への参加経験率（約六割が参加経験をまったく有していない）からうかがえるが、それはこのプログラムの巾の広さと、内容の高度さというところに一因を求めることが出来るように思われる。

その二としては、受講者に高い満足感を与えているということがある。これは高い出席率と満足感の度合いという二つの面からみとめられることである。が、そして前者の場合は公的な学習機会にくらべてかなり高額な受講料を負担していることもかなり左右しているとも思われるが、後者の場合は講師とプログラム内容の二つの要素がそれを規定している、といえそうである。施設・設備といった要素は予想に反して、それほど大きな要素として作用していないが、これは恵まれたその状態になれてしまったせいであるのかもしれない。

さいごに、これらの民間教育事業としての学習機会への参加者の目には社会教育が固苦しいもの、そしてPRが不

足しているという印象を与えていることが指摘される。これも、新聞社の事業として行なわれている両センターのもっている特色の裏返しのものともいえるものであるが、第一にあげた点とも関連して、社会教育としての活動がカバーすべき範囲を拡大する方向を考えるとときには充分意を注ぐべきことであるように思われる。

（古野 有隣）